
魔女猫番外地

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女猫番外地

【Zマーク】

Z0102K

【作者名】 たまれ。

【あらすじ】

たまれ。がメインで書かせていただいている【魔女と白い猫】のおまけ、小話をこちらに納めさせて頂きました。

【魔女と白い猫】の小話をぽつぽつのせていくつかな、と思います。
本編【魔女と白い猫】10／30に無事完結致しました。

魔女と使い魔の邂逅・使い魔編

月の綺麗な晩だった。

青白い月は柔らかく大地を照らす。

丸くて大きな月は、青田くてどこか物悲しい。

満月かな、とぼくは思つたけれど、かすむ瞳にそれはよく判らなかつた。

満月ならいいな。

ぼくはか細い吐息を落とす。

満月の日に死ぬのなら、なんとなく諦めがつく。

ぼくは小さなちっぽけな蝙蝠だ。

魔物でもあるけれど、これといって何ができる訳では無い。ほんのちょっとぴり魔法が使えたり、人間のように変化することはできるけれど、ぼくにできるのはそれくらいで一族の中でもつまはじき。

一族がそろそろ洞窟を追い出されたのは、仕方ないことなのかもしない。

ぼくみたいな役立たずが一族にいることを、みんな嫌がる。

一人ぼっちのぼくは、はたはたと飛んで
つと休んでいたところで猪に跳ね飛ばされた。
ぼく気づかなかつたんだよ。

休んでいた枝がそんな低い場所だったなんてさ。

だからぼくは一人、こんな場所で死んでいくんだ。

だから満月ならいいな。
月の光が優しい……

なんてぼくがほんやりと思っていたら、突然あたたかな光を感じた。

何かが月光に照らされる地面を更に照らす。
なんだろうと思えば、ふいに羽を持ち上げられた。

「蝙蝠？」
痛い。

少し高い声と同時に、ぼくは誰かにつままれた。

それは月を背負つた一人の少女。
赤味の強い金髪。眼差しは琥珀。

「怪我ならいつか
ふむ、と小さな咳き。

少女は笑んだ。

とつても嬉しそうに。

彼女はぼくの皮膜をびりりと広げた。
痛くて、おもわず身が震えた。

「キ……」

ぼくは痛みに小さく鳴いた。

少し驚いた様子の彼女は、ふいに「生きてる……？」と囁く。

もう死にそうだけれどね。

やがて彼女は「まあ、いいか」と小さく呟いた。

なにがいいんだろう？

ぼくが不安に思つてると、彼女はおもむりぼくに向かの光を近づけた。

それは優しい光。

ちっぽけな魔物のぼくにもそれはわかる。

月の光だ。

彼女は自分の指先に歯をたてて、ぷくっと血の血を出すと、口の中で何事かを呴いてぼくの口にその血を落とした。

途端、ふわりとぼくの体に風が流れた。

物凄い力が巡り、痛みがひく。

ぼくの中で何かが一気に駆け抜けて、やがてゆるりと落ち着いた。

ぼくは物凄くびっくりした。

彼女は魔女だ。

可愛くて、優しい、魔女。

こんなちっぽけなぼくを救い上げ、使い魔にしてくれた！

月の光と魔女の血で、ぼくを使い魔にしてくれたのだ。

「ああ、魔女さま…………ありがとうございます！」

ぼくの声はかすれた。
喜びで全身が震える。

魔女はびっくりしたように瞳を瞬いた。

うわあ、可愛いなあ。

こんな可愛い人がぼくの魔女さま。
ぼくのマスターなのだ。

「魔物だったの？」

小さな眩き、ぼくは置み掛けるように叫ぶ。

「ぼくのよつなかつぽけな生き物を使い魔にしてくれるなんて、ぼく……」

感極まつて言葉が続かない。

でもぼくは精一杯の気持ちを込めてもう一度口をひらいた。

「ぼく、魔女さまに、いえ、マスターに一生ついていきます！」
「……」

マスターはしづかにぼくを見つめていたけれど、やがてこいつと微笑んだ。

「そんなことはどうでもいいのよ。
あんたにはあんたの人生があるの。だからあたしのことなど忘れてい
いわ。

元気でね。じゃあわたし帰るから」

マスターはゆっくりと身を翻し、いつてしまふ。

なんて優しく謙虚なマスター。

ぼくのことをこんなに思ってくれるなんて。

ぼくは身がふるふると震えるほど感動した。

ぼくの人生なんて、もうマスターなしでは考えられない。

ぼくは感激でマスターからだいぶ距離をとってしまったけれど、大丈夫。

ぼくはマスターの血を頂いたのだもの。

マスターの使い魔として、マスターの居場所はもうどこにいたってばっちり判る。

一生ついていきます、マスター！

魔女と使い魔の邂逅・使い魔編（後書き）

感想などいただければめちゃくちゃ喜びます。

魔女と使い魔の邂逅・魔女編（前書き）

魔女と使い魔の出会いの話。

魔女と使い魔の邂逅・魔女編

月の綺麗な晩だった。

青白い月の光は柔らかく大地を照らし出す。

こんな夜は空を飛ぶのも、大地を歩むのも楽しい。

背をくんつと伸ばして、手の中で光球をひょいひょいと垂直に投げては手の中に納める。

ランタン代わりに月の光を凝縮してみたけれど、あまり必要ないかもしねれない。

月のきれいな晩。

ただし、それは十五夜ではなくて　　月齢で十二。ほんの少しだけ月は欠けていた。

何かが起こる時は、月がまん丸に肥え太っているのが好ましい気がするけれど、その日は生憎と月は欠けていた。

「つと」

あたしは手の中の球を取り落とした。

大地に落ちた光球は、じりじりと地面を転がり木にぶつかってぴたりと止まった。

あたしは肩をすくめて球をとろつと手を閃かせ、光球に照らし出された木の陰にそれを見つけたのだ。

「蝙蝠？」

蝙蝠が落ちている。

死んでいるのだろう。

あたしは瞳をまたたいて、それから蝙蝠の羽をつまむようにして掴んだ。

薄い皮膜に傷がある。

怪我をして落ちたようだ。

「怪我ならいつか

ふむ。

あたしはにんまりとした。

明日の天気はきっと晴れ。

ならば天日干しへして干物こしより。確かに、あたしの数少ない蔵書の中に蝙蝠の干物を使ってつくる丸薬があった。

病気の蝙蝠はちょっと薬にしたくないけど、怪我で死んだなら薬にしたっていいだろ？

あたしが手の中の蝙蝠をびりりとひらげて確かめていると、それはそろりと身を震わせて瞳を開けた。

丸くてつぶらな感じの瞳。

うう。

「生きてる……」

チッ、生きてるのかあ。

死なないかしら？

さすがに自分で殺すのはヤハナのよ。

「キ……」

蝙蝠がか細い声で鳴く。

弱々しく身を震わせる。

あたしは嘆息した。

「まあ、いいわ」

瀕死の生き物つて、そのまま放置するのも後味悪いしね。

あたしは先ほどから足元に転がっている月の光球を思念で動かし、
蝙蝠に近づけると月の魔力と同時に、自分の指先に歯をたてて血を出
し、蝙蝠の口元に数滴、垂らした。

弱き生き物に月と魔女の加護を。

蝙蝠の小さな傷がふさがる。

大きな怪我ならこの程度では治らない。薬だつて使わないといけな
いし、魔力だけでどうにかするには、長大な時間が必要だ。
まあこの程度なら簡単に治癒できる。

ふふふ、魔女つてやつぱりす"こと思つわ。

「ああ、魔女さま………ありがとうございます」

突然その蝙蝠が喋るものだから、あたしはギョッとした。
いかんせん「干物」としか見ていないものだから、いちいちそれが
普通の蝙蝠か魔物かなんて考えてもなかつたのだ。

だからその時があたしは「うわっ、干物がしゃべった」くらいの感
覚で随分とぎょっとした。

「魔物だつたの？」

あたしは手の中の「干物」もとい、蝙蝠を見下ろしていった。

「ほくのよひなちつぽけな生き物を使い魔してくれるなんて、ほく

……」

使い魔？

は？

何の話だ。

と、ふいに思い出す。

確かに、魔女、魔導師などの不思議な力操るものと魔物は、月の加護と血のもとで「契約」を取り交わすのだ。

「ぼく、魔女さまに、いえ、マスターに一生ついていきます！」「……」

月の加護と魔女の血を取り入れた蝙蝠がはたはたとためいている。

今のナシ。

あたしはにっこりと微笑んだ。

「そんなことはどうでもいいのよ。

あんたにはあんたの人生があるの。だからあたしのことは忘れないわ。

元気でね。じゃああたし帰るから」

あたしはぐるりと身を翻し、わざわざ歩き出す。

今のナシ。

今のナーシ。

もしくはチヒンジ。

あたしはまったく関係ありません。

せつかく使い魔にするなら、蝙蝠なんて脆弱な生き物じゃなくて、

魔女シェルティが使つてゐる火蜥蜴とかのほうが便利そつ。蜥蜴の癖に火をあやつるのよあいつ。

蝙蝠に何ができるむと?

逆さまにぶら下がるくらいしか能がなさそつな蝙蝠など欲しくない。どうせなら干物のほうがずっと良かつた。

あたしはきつぱじと意識を切り替え、やれやれと自分の家に帰宅した。

翌朝、自分の部屋に蝙蝠がぶら下がつてゐるのを見た時の脱力感は今も忘れない。

幾度「お使い」と称して僻地に送つてもそのつど帰つて来る蝙蝠にて、あたしはそのうち色々と諦めた。

まあ、いいか……

魔女と使い魔の邂逅・魔女編（後書き）

「うひして使い魔の「本当は不憫なんだけど不憫と気づかない
幸せな生活」がはじまるわけです。

えっと……うん、使い魔は幸せですよ？

使い魔の独白

ねむい、ねむいなあ。

ああ、どうも。

ぼくは愛すべき魔女ブランマージュの使い魔、あまり名前は呼んでもらえないけれどシユオン、と申します。

ぼくの本体は蝙蝠です。

暗いところは大好きだし、どちらかといえば夕方に起き出したいんだけど、今は朝。

愛すべきマスターの朝食の用意をするのもぼくの大事な仕事です。

いぜんぼくがちらつと「朝は弱いんですね」とぼやいたら、心優しいマスターが、

「じゃあ鳥タイプの下僕でも捕まえるかなあ。あいつら朝は早いでしょう」

とともになげにいつてましたが。

断然・全力で・却下です！

マスターの使い魔はぼくだけで十分！

そんな訳のわからないヤツを迎えるくらいなら、ぼくはどんな現状にだって耐えれます。

マスターはぼくだけのマスターであつて決して他の誰かのマスターであつては駄目です。

ぼくは朝食の準備をすませ、マスターが寝ている寝室を覗き込みました。

すぐ起しあわせん！

まずは観察です。

寝てます 「うう、可愛くなマスター。
ぼくが昨夜ベッドメイキングした寝台は、何があればこんなになる
のだろうといつ程に乱れまくり、シーツははがれ、布団は団子のよ
うになつてマスターの手足がからみついてる。

抱き枕を作つてあげようかな、なんて思つたれどそれはしません。

だつて！

布団を抱いてるのだから良いのですよお。

ネグリジエからまだてる健康的で艶やかな足だと、時々腹まで
見えぢやつてるトコとか！

抱き枕があつたら全部布団の中は離されてしまひじゃないですか。
そんな残念なことしまへては到底できません。

ああ、ヨダレなんてたらしひつて、可愛いつたらありやしない。
ぼくはにまにま緩んでしまう口もとをひきしめ、ハンカチでぢん
とヨダレ拭つてあげます。

そうしてやつと、マスターに顔を掛けます。

「マスター、おきてくださいよ。

朝ですよ？

スープが冷めちやりますよ

「ん、んん……あとちゅうつと」

そもそもどうして、温かこというを求めるマスター。

艶やかな赤味の強い金髪が寝台の上で散ります。

少し癖があるけれど、ふわふわとして可愛い。

「マスター」

「んんん」

むにゅむにゅむにゅと口が動く。

何か呟いたと思えば、マスターの手に杖。

それをおもむろにじりじり振りかざして、まくは避けよつて思えば、まぐれでいみで受けた。

痛い、痛い、痛いけど……幸せ。

「マスター、おきて下さることお

ゆるゆるとマスターの臉が開いて、金色の眼差しがじりを捕りえました。

金色。

それはあつと角度によつてで、光の反射がそう見せるんです。よくみれば柔らかな琥珀のような美しい瞳。

朝の潤んだ瞳でみあげてくれるマスターは犯罪的に可愛い。

こんな可愛いマスターをもつたぼくは世界一幸せな使い魔に違いない。

じぱりじぱりじぱりを見ていたマスターでしたが、ふいにじりじりと微笑んだ。

「シユオン」

名前を呼ばれると鼓動が跳ねる。
甘えたような声。

「昨日ね」

「はい」「

「いいこと考えたの」

ふふふっと、魅惑的な笑みを浮かべてマスターはぼくの頬に触れました。

どきどきどきどき。

マスターはどうんな素敵なことを考えたのでしょうか。
ぼくは口元がだらしなく緩むのを感じます。

「こないだあたしのことを、能無しだの下らぬだと吐き捨てたあのエイル・ベイザッハの顔を蒼白にしてやる作戦よ」
マスターは同じ魔力を操るものとして、エイル・ベイザッハ魔導師と顔をつき合わせてはぐだらない いえいえ、高尚な言い合いをしているのです。

エイル・ベイザッハは努力の人。
勤勉で、魔道に関しては貪欲。

そしてマスターは努力しなくともできると信じつつマをする、ちよつとおつちよこちよいなどこうがあるから、どうしても仲良くなれないんじゃないかな。

まあ、ぼくのマスターがぼくいがいと仲良くしないのはとってもいいことです。

マスターはすいと杖を閃かせる。

「あんたがエイルの顔で男をたぶらかせばさすがにあのスカした顔も色を変えるわよ！」

……それ、ぼくがやらないと駄目ですか？

いや、はい、マスターがやるなんてとんでもないです。
はい……ぼくの愛は不滅ですか？

何があつても。

大魔女とチビ魔女（前書き）

5000ユニーク、45000PV突破ありがとう記念。第一弾。
つてか本当は1万ユニークとかでやるほうがいいんだろうけど、嬉しいんだからいいんだよスペシャル。

レイリッシュとチビの頃のブランマージュ

大魔女とチビ魔女

十歳の頃だと思う。

あたしがその魔女に引き合わされたのは。

だと思つて、いつのまにか、いちいち産まれた日なんて祝つてられる程裕福な家じゃなかつたつて「コト」が理由。物凄く大雑把に、あんたは寒い時期に産まれたつくな、なんてちょっとボケの入つたばあちゃんが言つていた。

ばあちゃんの話だから、それだつてあやしいんだけどね。

エリイフィアに、「あんたいつ産まれたんだい？」といわれた時、あたしはやつぱり大雑把に「寒い頃」と応えた。
やがてエリイフィアはこう言つた。

「あんたが私の娘になつたのは温かい風が吹く季節。

白い花ソルシエの月。その七日目のことだ。だからあんたはこれからその日に産まれたつてことで一つづつ年を刻むといい

その意味が判らなくて、でも嬉しいってことだけは判つた。

エリイフィアはあたしの姉で師匠で、そして母親なのだ。

「じゃあ、レイリッシュュ様はあたしのばあちゃんだね

そう言つたのは、黒髪の大魔女と初対面をすませたあとだ。
あたしは物凄く驚いていた。だってレイリッシュュときたら今までみた誰よりも綺麗だった。

艶やかな黒髪も、口元に塗られた真っ赤な口紅も、全てが全て綺麗だった。

セのレイリッシュを示して、エリイフィアは言ったのだ。

「この方は私の師匠。レイリッシュだ」

つて。

師匠の師匠だから大師匠。

お母さんのお母さんならばあちゃん。

あたしだってそれくらいの常識を知っているのだ。

レイリッシュはこいつと微笑した。

物凄く綺麗な微笑みだった。うつとりするほど綺麗。

その手がおもむろにあたしの頬をぐにりとひっぱり。

「口は災いを呼ぶのよ、末っ子」

「ひひややや」

「あたくしのどこのみでそんな単語がでるのかしら？　あんまり可愛くないと苛めてあげるわよ？」

「レイリッシュ、辞めて下さい。子供のこいつとではありませんか？」

「あなたの教育が悪いのではないの？　エリイフィア」

レイリッシュはこいつと、エリイフィアの頬までつねりあげた。

あたしはびっくりした。

慌てて両手を伸ばしてレイリッシュの腕に縋る。

「エリイフィアを苛めないで！」

「あら、駄目かしら？」

勿論駄目だ。

「ふふふ、師匠が好き？」

「好きだよ。エリイフィアはおかあちゃんだもの」

本当のお母さんはお別れしなければならなかつた。

一人で寂しくて何度も泣いた。

そのたび、エリイフィアはあたしを抱いて寝てくれた。

魔女はどうしたって修行しなければいけないんだ。親元にいて親を傷つけてしまった魔女は一杯いる。

仕方の無いことだけれど、あんたは親の前でちゃんと笑えたね、あんたは偉いよ。私はあんたを誇りに思う。

だから、あんたは立派な魔女におなり。

「可愛い末のブランマージュ。

あなたが無事に修行を終えたらあたくしの大陸へいらっしゃい。
未熟なあなたがいても平気なくらい平和な場所を用意してまつて
あげるわ」

「エリイフィアの大陸は駄目なの？」

「魔女は家族だけれど、直接の師匠と弟子とは同じ大陸にいてはいけないの。

そういう約定　　これは人間との間に定められている約定だから。
だからあなたは私の大陸においてなさいな」

さんざひつぱつた頬を優しく撫でて、レイリッシュはすっと体を起こした。

「それと、ブランマージュ」

「なに？」

「私のことはレイリッシュとお呼びなさい。

様なんてつけなくてよくてよ。魔女は家族なのだから

「

その代わり、

「今度おばあちゃんなんて言つたら頬をつねるだけではすまなくて
よ？」

レイリッシュの年齢は永遠の謎だ。

大魔女とチビ魔女（後書き）

次はエイルとレイリッ シュ。

最後の予定でロイズの小話の予定です。

ヒール・ベイザッハの深淵（前書き）

うんたらかんたら（もう適當入った）記念第一弾！
レイリッシュとヒール・ベイザッハの邂逅編。

エイル・ベイザッハの深渊

大陸には六人の魔女がいる。

魔女は魔力の源。魔力の結晶。

その能力は未知数であり計り知れない。

エイル・ベイザッハが対面を果たした魔女は黒衣のドレスに魔女らしい帽子、その唇は赤く引き結ばれた美しい女だった。腰まですらりと伸びた黒髪の、美女。

「あれが……」

誰かの言葉が耳に入り込む。

続くことのなかつた台詞だが、誰もが思つていただろう。あれが、レイリッシュ。

この国の王に仕える、宫廷魔女レイリッシュ。

それはすなわち、魔導師達の頂点に君臨するもの。

魔導師達にとつてそれは王よりも搖ぎ無い存在だ。

魔女とは。恐怖の象徴である。

だが絶対的悪に落ちぬ為の制約が幾つか存在し、魔女達はそれを律しているのだといつ。

魔女が廊下を歩めば、その恐怖に知らず誰もが道をあけて頭を垂れる。

エイル・ベイザッハもそれにならつた。

体が、本能がそうせよと命じるのだ。

「おまえ 見たことがあるわ

かつりと魔女の足がエイルの前で止まる。

つゝと細く長い指先が伸びてエイルの顎をさらうと、ニッとの歯を引き結んだ。

「そう、おまえね」

「…………なにか？」

「おまえ、魔物を融合させて遊んでいるよしね？」

あまり無体な真似ばかりしていると、身を滅ぼすわよ？」

「それが何かの咎にかかるとでも？　ヒトを使つていい訳ではありません」

「ふふ、できれば人を使いたいという発言ね。

まあ、いいわ　　私達の理とおまえ達の理は違うものね？」

楽しそうに笑みを浮かべる魔女に、自然と視線が落ちそうになる。

恐怖

我知らず、血の氣が下がる。ひんやりとしたものが這い登る。

今まで非道とも言われる実験を繰り返していたエイルにとって、恐怖なども持ち合わせていないのではないかと思つていたというのに。

それは本能を搖さぶる。

相手は、ただ、美しい笑みを湛えた女だというのに。

口腔に、意味もなく唾液がたまる。

それをゆっくりと嚥下する。

ただその行為すら　　氣取られることがひどく恐ろしい。

顎を撫でた指先が、そのままエイルの薄い唇をなぞった。

魔女はヒトとはまったく異なる異質な種。

魔導師が書き記した書物の一説が過ぎる。

魔女とは ヒトではないのだ。

ふふつと、魔女が笑みを刻んだ。

「精進なさいな。人として」

何が楽しいのかそつと耳元に囁き、魔女はそれまでの興味など失せた様子でエイルの横を通り過ぎた。

あいつ、魔女殿と話しをしていたぞ？
なんと羨ましいことだ。

馬鹿な囁き声が耳に触れる。

エイルはざりつと奥歯を噛み締めた。

それまで培われていた絶対の自信のよつなものが、びしりと亀裂をうんだ。

魔導師と魔女は違う。

まったく別の 決して同じ何かではない。

それをまざまざと突きつけられた。

鋭い切つ先のように。

喉が干上がるようになっていた。

もう一度と魔女になど遭遇したくない、その思いと同時にまったく別種の感情が芽生えた。

魔導師が必ず叩き込まれる、ある一人の男の名が脳裏によみがえる。一旦伏せた灰黒の瞳が、何かの儀式のようにゆっくりと、ことさらゆっくりと開いた。

エイル・ベイザッハは口角を引き上げ、静かな笑みを湛えて歩き出

す。

先ほどの恐怖をねじ伏せて。

エイル・ベイザッハの深淵（後書き）

…………もつといづ、爽やかに生きる。

続いてはロイズの話 ですが、こちらはまた後日書きます。
読んでくれる皆様に感謝を。

ロイズ・ロックの隊長就任（前編）

うんたらかんたら（また一回）記念第三弾。
ロイズ・ロックの話。

ロイズ・ロックの隊長就任

おめでとう。

にっこりと言われたが、どの辺りがめでたいのかロイズ・ロックには判らなかつた。

「まあ、小さな町だが、警備隊長なら立派な出世だよ。

おめでとう」「まあ、とりあえずは一応栄転といつていいのかもしだいが。

大陸の中央にて警備の任についていた。

平隊員だが、これといつて欲もない。

実家は伯爵ヤンガー・サンという爵位を持つていたが、次男ヤンガーハーフである自分に何の意味も無い。実家から歩いて通える距離に隊舎があり、何の不便も無い。爵位も無いから地位も気にせずに極普通の娘さんとなんとなく結婚して、子供は一人くらいできて、そういうのがきつと幸せなのだまあ、そのうちに。

などと考えていたというのに、突然の辞令だった。

南西に位置する、名前もさっぱり判らない町だ。

地図で確認したら、本当にちっぽけそうな町。

「魔女がいるぞ」

上官はニッヒと口元をゆがめた。

「魔女……」

生憎と、ロイズ・ロックにとつて魔女なる生き物は「珍獣」だ。話には聞くし、一度や一度ならば見たこともある。ただし、遠くで。

そもそもがこの大陸に五人だと六人だとかいな存在だ。

そろそろ自分に関わるものでは無い。

魔女の魔力でもってこの世界の大気が支えられているとか、魔力がいるから温暖な気温でいられるとか 眉唾もいいところだ。

ただし、史実として伝えられている。

その遙か昔に、魔女狩りが行われ、その後は各地で気象が荒れたり地殻変動が起こったりとたいへんだつたという。

この世は魔女という魔力の柱の恩恵の上で成り立っている。

つまり、現在魔女は厳格に「保護」「管理」されているのだ。

さて、ロイズ・ロックの左遷だか栄転だか判らぬこの人事は、家族にはたいへん喜ばれた。

父親はさつそく行く先に邸宅を一つ作り、それを息子に「えたし、母親はその邸宅の人事をさつさと定めた。

そして兄は、苦笑した。

「紛争地帯に行かなくて良かつた」

「まあな」

「親元を離れるんだから、多少ハメを外せよ?」

「……」

「眉間の皺、それなくなるぞ?」

兄はクツと喉を鳴らして笑い、實に母親によくにた天使のような笑顔でもつて、

「彼女の一人くらいいつくれ?」
などと言つ。

誤解があるようだから言つておくが、別に今まで誰とも付き合つたことが無いわけではない。

大抵の女性が、何故か一度・二度の「トークで」「あなたは仕事が御好きですね」と深く溜息をつくのだ。

それを合図にしたように、関係はぱたりと終わる。

そういうものなのだろう。おそらく。

「そりいえば、魔女殿が

ふと、兄が呟いた。

ん? と視線を向ければ、兄は苦笑する。

「ブランマージュ殿が暮らしているそつだね、君の任地には

「知り合いか?」

「 知り合い、という程ではないよ。あむらはいつの頃からすら

知らないかもしない」

兄はふっと視線をそらした。

「まあ、色々と覚悟して行きなさい」

「意味深に言つた。どんな覚悟だ?」

兄はしばらく無言でロイズを見上げ、やはり視線をそらした。

「……ブランマージュ殿は一番年若い魔女だ。

今はまだレイリッシュュ殿の庇護を受けておいでだから、時々宮殿にもいらっしゃる

だから知っているのだろう。

兄は富仕えだ。

「 彼女が来た後は、しばらく仕事が停滞する

「は?」

「先日は下士官の寮を羊が埋め尽くしてね……うん、掃除がたいへんだった」

「……は?」

兄はそらした視線をそのまますがめ、深く、深く息をついた。

「かわいそつに」

「なにが？」

「いや うん、がんばれ？」

ぽんつと肩に置かれた手が、やけに力強いのが気に掛かつた。

まあいい。

どこでどう暮らしても、そもそも魔女なる存在にそういう遭遇することもあるまい。

同じ町にいるといったところでは、魔女とはあまり出歩くものでは無いといふし、時には魔物の討伐などで忙しいと言つ。ついで警備隊長に関わることもあるまい。

平和で平凡が一番だ。

小さな町で紛争も無いという。

知人には左遷だなどと軽口を叩かれたが、なに、ポテンシャルの問題だ。

ロイズは意氣揚々と任地についたし、顔合わせもそつなくすませた。

「ここにちは」

につこりと面前に立つ少女に、無骨な調子で挨拶を返す。

この町の住人は新参のロイズに一々声を掛けてくれるのだ。

立っていたのは赤味の強い金髪の少女だった。

琥珀の瞳が珍しい。光の加減で金とすら思つた。

少女、というよりも女性というほうがいいのかかもしれないが。体躯の良いロイズより随分と華奢だ。

につこりと微笑み、小首をかしげる。

「あの、警備隊の方、ですよね？」

「ああ」

「あの、そっちのほうに へんな人がいて、あの……一緒に来て

もられますか?」

不安そうに瞳を揺らし、道の折れたほうを示す。
年若い娘が一人歩きに不安でも抱いたのかもしない。
うなずいて彼女の前を歩いていき、道を曲がった。

途端 足元にある筈の大地がぽっかりと大きく穴をあけ、何の
タメもなく、落ちた。

「ギツツ」

奇妙な声が口の端から漏れる。

何がどうなつたのか判らぬままに、落ちる。

血の気が下がる浮遊感と一緒に、バシャンッと激しい水音が響いた。

「……」

「キヤー」

「やつたーつ!」

わらわらと子供達が現れ、穴の上から水浸しのロイズを見下ろし、
その中央 先ほどまで可愛らしくはにかんでいた娘の瞳はイキイ
キと輝いていた。

「チョロイわ!」

チヨロイって、なんだ。

ぱたぱたと前髪から水が落する。

先ほどまで確かにこの穴の中は水で充たされていたというのに、今
は嘘のように水が無い。ただ、ロイズの全身はびしょぬれだった。

何がおこったのか判らない。

ただ、兄の声が耳の中によみがえった。

「かわいそう
いやうん、がんばれ？」

ロイズ・ロックの隊長就任（後編） (後編)

うん、がんばれ。

……ちなみに兄ちゃんはレイコッシュにこじ使わわれている文面です。

兄ちゃんもがんばれ。

森にて（前書き）

本編があんまりにもジリジリつまらなかつたので、こちるに一本追加。

森にて

ブランマージュの森、と呼ばれる森は元々は違つ名前の森だった。勿論、それは魔女が住み着いたから、人々は【ブランマージュの森】といつ之間にか呼ぶよになつたのだ。

暗い夜道を蝙蝠がはたはたと過ぎる。

森にぽつかりと作られた小さな家を前に、蝙蝠はぽんつとヒトの形になつた。

「おや、おかえり」

その家に今いるのは本来の主ではなく、髪をひとつめた眼鏡の女性だ。

淡い金髪に細身の眼鏡。普段から不機嫌そうにその田は細い。自然と背筋が伸びて「先生」めんなさい」と他人に言わせそつた雰囲気を持つ。

「エリイフィアさま、来てたんですか?」

「定期的に来ないことは仕方ない。」

まったく、あの馬鹿娘はいつまでたつても面倒をかけてくれるよ

呆れた口調そのままに魔女は鼻に掛かる眼鏡のツルを押し上げた。「昼間にうちに村のやつが来てた。

子供が熱を出したとかでね、クスリを出しておいた。もし明日までにまた来るようなう一度見に行くから、あんたも気にかけておいで

「はい、すみません」

「あんたが謝ることじゃないね。

悪いのはあの馬鹿娘さ。それに、あの馬鹿娘の尻を拭うのは母であり師である私の仕事だからね」

ふんつと鼻を慣らし、エリイフィアは目を細めた。

「何か言いたそだね？」

「……マスターは、このまま体を見つけられないどじうなるんですか？」

「わかつてゐだろ？」

猫の体に無理に収まってるんだ。魔女の魂をあんな小さな器に入れて、今はその魂を守る為にギリギリの魔力まで与えている。
負荷が掛かりすぎた 無茶をすれば魂が融合して消え去るか、
猫の体が死ぬか、まあ、どちらにしろあの子にとつて楽しいことじやないね」

使い魔の顔が歪む。

「だからといつて妙な手出しさはするんじゃないよ？」

使い魔の心を察するように、エリイフィアは嘆息交じりにいった。

「あの子はあの子の手で見つけなければならない。

他人が手出しを許されているのは、あの魔導師だけだ。それだって、最終的には何の力にもなれないことは判つてるだろ？

おまえが妙な手出しがして全てを台無しにしちまつたら それ

いや、レイリッシュは最終手段に出るだろ？」

今回のこととは土台レイリッシュにしても私にしても随分と無茶をやつてるんだ。

今にも泣き出しそうな使い魔の様子に、ふつとエリイフィアは微笑んだ。

「すまないね」

「エリイフィア様？」

「あの子が愚かなのは、私の教育が悪かつたからさ。
あの子の我儘を許しちまつたのは私だからね」

厳しくすればするほど、ブランマージュは反発した。
最終的にエリイフィアの手を離れたのだって、家出同然。
それでもブランマージュはレイリッシュに居場所を求めただけ
ば褒めてやってもいい。

レイリッシュに甘えてしまったのだ。

大魔女のもとであれば大丈夫だと。

げんに、未熟な娘のためにレイリッシュは平和な小さな町の横にある
森へ住むようにと居場所を与えた。

悪意持つ魔物が多くいる場所や、人々が争いを繰り広げるような
場所から遠く離れた場所。

年若い幼い娘を、魔女達は愛していた。

その娘がことある間に魔女の理の書すら読んでいないとは！

段々と怒りが沸いてきた。

勉強していないにも程がある。

いいや、勉強はしたはずだ。さらりと表面だけをなで上げて、あげ
くすっかりとそれを脳内から締め出したに違いない。

「えつと……エリイフィア様？」

ふつふつとした怒りが顔に出たのか、使い魔が怯えたような声を出
す。

「どうやらしる、誰にもどうともできなーさ。

私たちは見守るしかできない」

大きく息をつき、使い魔を眺める。

「あなたも覚悟だけはしておきな
主を失う覚悟を。

魔女のひとりと冷たい視線を受けて、使い魔はうつむいた。
「ぼくは…………ずっと、ずっとマスターと一緒にです」

「ううかい

難儀な子だね。

そういうながら、エリィフィアは慈愛のこもった眼差しで使い魔を見た。

「あの子は幸せモンだよ」

森にて（後書き）

やばこーじゅめもジバ!!だつた。

バレンタイン（再録）

「ロイズ・ロック隊長殿御仕事」へろーわね

ふふんっと鼻を鳴らし、屋根の上から魔女が言ひ。

ロイズは一回それを見上げたが、軽く無視してその脇を抜けた。

「まちなさい、この熊男！」

「近所迷惑だ、ブランマージュ」

「もお、愛想の無い男ね。

まあいいわ。今日は許してあげる。だつて今日はバレンタインです

もの

「だからどうした」

「あら、バレンタインには愛情を込めて花を贈るのよ。

もちろんあたしは寛大だから、熊男からの花だつてもうひとつあげる

「そんなものは無い」

きつぱりと言ひつと、ブランマージュはふわりと浮かび、ロイズの前でふかふかと浮かぶ。

「つーコーラーん」

「ああ、もうつむかいでいい。

今が何時だと思つてゐるんだ？」

ロイズは夜警の最中だ。

右手に下げたランタンが淡く揺れる。

「エイルも何もくれなかつたー

不満そうな魔女に、嘆息して「さりとポケットに手を入れる。

町で出合つた供達の為に用意してある菓子。

チラリノートを取り出し、包みをといて、

「これでも食つてひ

そして寝ろ。

不満を口にする口の中にはいつまでもやつた。

「ふふつ」

ブランマージュは口の中でどうけた辻さに機嫌をなおし、手を伸ばして、もつすでに背中を向けて立てる男の肩を掴み、

耳元に囁いた。

「隊舎裏の馬房の柵、うつかり開け放しにしちゃつたから、早くいかないと馬に逃げられるわよ」

「おまえっつ」

「おやすみなさい、ロイズ・ロック隊長殿！
いい夜を！」

ハッピーバレンタイン。

禁忌の味

魔女は力の源といつ。それがどういひことであるのか、魔導師は基本的に書物の上でしか知らない。

何故なら、魔女は絶対数が少なく、また調べようにも当人の協力なくして調べることができない。

過去に数名の魔導師が魔女を捕獲したといつが、魔力値でいえば魔導師と魔女の値は歴然と違う。

残る書物によれば、魔女とはまったく未知であり人とはまったく違うものである。

人とは異なる、魔女といつ種。

そう残すものもある。

ためしに幾度かエイル・ベイザッハは魔女に向けて魔道呪文を向けてみた。

魔導師はあらかじめ宝石に魔方陣を記録したり媒体を使用したり、増幅器を使わねばならないことを、魔女は容易くこなす。

このじてんで力量が知れるといつものだ。

魔導師には魔女を害することなどできよつはずがない。

その魔女が雷撃によつて打ち落とされる。

それはエイルにとつても衝撃の場面であつた。

じつさい、あの年若い魔女は未熟だ。

魔女は何でもできると過信して、学ぶといつことを知らない。

魔道書や禁忌の書の類でさえ見ていないのではないかと思う。

その魔女だからこそ、そんな攻撃に撃墜されたのだろう。

エイル・ベイザッハは口元に笑みを刻んだ。

魔女を手にいれる。

それは甘い、甘美な誘惑だ。

決してやつてはいけないと魔導師であれば皆叩き込まれる。それは魔導師の禁忌。

魔女を、手に入れる。

その昔、ある魔導師がやつたとされる危険な行為。魔女を手に入れ、その血を飲み、肉すらそぎ落とし食らいを漬し声を奪い、幾重もの魔道呪文の鎖で繋いだ。

喉

純粹なる魔力。

魔道具として

腹の底が冷えるような感覚。

魔女を捕らえる。

なんと魅力的な誘いであろうか。

はじめのうちに、殺す気など毛頭無かつた。だが、途中から呪文を切り替え殺す氣で打ち放った。絶命まではしない。

動けなくなれば良いのだ。

口が利けなければなおいい。

深い深い地に閉じ込め、幾重にも結界を重ね。

あの魔導師の失態は、魔女の力を使おうとしたからばれたのだ。
ならば私は使わなくとも良い。

おのれの探求に全てを貰へすだけでよい。

魔女を、この手で。

堕ちた魔女の全てをこの手で暴く

それは…… 儢い、夢想。
腹の奥深い、とろとろと流れる 浮かんでは、消え、そして浮
かぶ。
うたかたの、

「ああら、あたしに『よつかしら、ダーリン?』

好奇心の強い金の瞳。

琥珀の眼差しが光を受けて金色に瞬く。

気の強い口元が笑みを刻みつけ、『あらの反応をうかがうのは怒らせようという算段だ。

愚かな魔女、ブランマージュ。

魔女の血に、肉に、力があるのだろうか。
それは何かを変えうる力であるのだろうか。
禁忌は、どのような味をしているのだろうか。
「いや 」
口もとに笑みが浮かぶ。

おまえの味を知りたいのだと、言えばおまえはどのような顔

わかるのだね。

禁忌の味（後書き）

地雷踏んだ氣があるのはひつじでしょうか……

戯れ（前書き）

本編がきつかったので、仕事の合間に仲良しな一人が書きたくなつて衝動的に書き上げてしましました。
それでもやっぱり二人のコンビが好き。

戯れ

ロイズがくつきりと眉間に皺を寄せ、その奇妙な瓶を眺めていた。じつと睨みつけ、腕を組んで、難しい顔をして。

その時あたしはそれを興味深々で見ていた。

一瞬ロイズつてば病氣かしらって思ったのだけれど、何か違うのよ。難しい顔をして、あたしと薬とを見ている。

それから大きく溜息を吐き出して「まあいいか」と呟いた。

「で、コレがその薬です！」

あたしはふふーんっと鼻を鳴らしてエイルの前にその問題の小瓶を閃かせた。

中身は液体ではなくて粉末です。少し茶色い。

「で？」

ノリが悪いわよ、ダーリン！

「ダーリンは薬とかくわしいでしょ？」

「おまえもそうだろ？」「

淡淡と言ひながらあまり興味を向けてくれないエイルだ。その手はずと何事かを書き記している。

「ふふふ、あたしはあ、ちょっとこの手の薬は判らないのよん

「なんだその言い方は」

「きっと媚薬とか、精力剤だと思つのよー。」

チツ、無言になつたわね、ダーリン。

「つて口上で、ちょっと調べてみてよ」

「なんで私がそんなことを」

「ふふふ、隊長殿の弱みを握つてやるのよ。絶対にあとあと役に立つわよ。」

どうする、この薬がものすりこ薬だったり、はたまた惚れ薬とか
だつたりしたらものすりーく楽しいと思わない?」

ロイズつてばどうこう顔してこんなもの買つたと思う?
もう想像するだけでお腹よじれちゃいそうなんださー!」

「少しも楽しくないが」

ノリが悪すぎますよ、エイル。

あなたは本当に立派な成人男子ですか?

そんな貴方だからこそ!」

あたしはにまーんつと口元を歪め、きゅぽんつと問題の薬瓶の蓋を開けはなつた。

「こりしてくれるううう」

「なつ、この戯けがつ」

半分ぐらこばさりとエイルに掛けてやる。

あ、もしかして飲み薬?

それだと駄目か?

あたし失敗? なんなら口の中に無理矢理押し込んで……

「ブランマージュ?」

エイルが瞳を眇めた。

「おい?」

「なんか……いいにおーい」

あたしはふにやりと体の力が抜けた。

尻尾がぱたぱたと自然と揺れて、なんとなく体が低くなる。
むしょに体を何かに摺り寄せたくて、そう、いい匂いのするエイ

ルにすりすりとすりよった。

「エイルう、なんかいいにおーい

なんか凄いスキーッ。

すつごいスリスリしたい。

いやあん、スキーッ。

エイルはくつきりと眉間に皺を寄せ、残った薬瓶を引っかみ、

「媚薬……？」いや

「またたびか

いやそうに呟いた。

あああ、エイルがいいにおいしい。

「私の服に涎よだれをたらすな。

噛かみ付くなっ、舐なめるんじゃない！

戯たわけ！

エイルはつづりとした様子でその後あたしを風呂に叩き落した。

……反省してます。はい。

戯れ（後書き）

なんだかんだ言って仲良しです。

愚か者

いろいろと思い出したくない。

あたしは不機嫌だった。

それは当然だ。

理由は簡単、ロイズのあんぽんたんが意味ありげに持ち込んだ【またたび】、あたしはね、あれはきっと超強力な媚薬とか精力剤だと思つたのよ。

だからあ、不機嫌なエイルの恥ずかしい痴態 なんかいやらしいを笑つてやろうと思ったのよ。それと同時にロイズがこんなものを持っていた事実を後々の切り札にしようという、なんとも御得なセットを楽しもつと思つたのに。

現実は【またたび】

恥ずかしいことをしでかしたのはあたしがどうこうじよ。

あのエイルにすりすりしちゃつたじゃない。

噛み付いたり舐めたりしちゃつたわよ！

覚えてるこの記憶を取り出したい！！

エイルはあたしの襟首を掴み上げ、そのまま浴室のバスタブに放り込んだ。

「愚か者！」

つて、ひひして思い出しそるしな、あたし！

ふんつとロイズの邸宅、居間のソファで不機嫌になつてているあたしの前でロイズ当人は首をかしげている。

「ヒリサ、ここにあつた小瓶知らないか？」
「ケツ、無いわよ。

捨ててやつたわよ。

そもそも、あんなものあんたどうするつもりだったのよ。

「まあ、いいか」

大雑把な性格の熊男は咳き、ソファにいるあたしをひょいと持ち上げていつも通り膝に置いた。

「ほら」

ふいにポケットから妙な棒を出す。

つんつんっと鼻先で動かされ、あたしは眇めた視線でそれを見た。じゅれろって……

「何ですか、それ？」

「またたびの木。うちの所長が猫もストレス発散させないと駄目だつて言うからな。

粉ももらつたんだが 無くしたようだ」

二人の会話がどこか遠い。

あたしはとろりと酒を呑んだ時のよつに酩酊感を覚え、自然と口元が緩んでしまう。

「ふにゃう

あああ、スキー。

この匂いスキー。

我慢できないいい。

細い枝に一生懸命体をこすり付ける。

腰碎けるう。

ハムハムしたい。

はううう。

立つてられないよお。

「……」

「凄い酔っ払つてますね」

「……」

膝の上でぐろぐろになつて枝に身をもだえている猫を見て、ロイズはおもむろにその枝を取り上げ、ゴミ入れに放り込む。

「若様？」

「いや、うん……オレはもつ駄目かもしねん」

「はい？　え？」

ロイズは鎮痛な様子で子猫を抱き上げると、まだ酔っ払つたようになつてはうはうと自分の指を噛むソレを風呂場に運んだ。

愚か者（後書き）

【またたび】ロイズバージョン

愚か者は私があああ。

何書いてるんだつ。ロイズがどんどん壊れてく（笑）
ちなみに使い魔バージョンは書きません。

想像したのが人間バージョンプランだったから……一人みたいに風
呂場に叩き込んだりしないと思うのよ、うん。

クホイードと猫（前書き）

突発思いつきネタ。

クエイドと猫

「あれ、また猫連れて来たのか?」

警備隊隊舎 第二隊室の壁沿いに作られている腰の低さの物置の上、白い猫が寝ている。

遅刻ギリギリで隊舎に入ったクエイドは苦笑しながら猫の頭を撫でた。

その猫はもう幾度か見たことがある。

警備隊第一隊隊長、ロイズ・ロックの飼い猫だ。

首と胴体を交差させた紐でくくられている。この紐は仕事上でも良く使われる品物で、捕り物などに便利な魔道具の一つだ。

囚われれば紐をつけたものにしか外せない。
そこまでしなくとも、と思わず笑いが漏れた。

「隊長は?」

「所長のトコですよ」

部下の言葉にふーんと鼻を鳴らして応え、猫をひょいと持ち上げてみる。

「なううう

イヤそうだ。

じたばたとあはれているが、勿論子猫が暴れたところで何がどうなるものでは無い。

「今日はどうして連れて来られたんだ?」

「さあ、なんか所長が連れて来いつて言つてたらじいですよ

なんだろうねえ、とクエイドは言こながら猫の首の下を撫でてやる。

「みやう

「お、気持ちいいかあ？」

クエイドは毛のある生き物は全般的に好きだ。飼つまではしない。生き物に対して責任をもてないからだ。だから見かければ構うが、基本的にはそれだけだ。

物置にくくられている紐は長い為、近くのソファに座つて膝の上に猫を乗せる。

手入れのこきどどいた猫の手触りが気持ちいい。

持ち上げて匂いをかげば、石鹼の良い香りが漂う。

「しつかしさあ、うちの隊長と猫つて組み合わせがす」「よな？」「もともと隊長は面倒見がいいですよ」

「まーなあ。でも、どつちかつつうと隊長は犬派にみえねえ？ でつかい犬を従えてるかんじ」

「ですねえ」

膝の上の猫がクエイドの指をがじかじとかじる。

噛み癖があるのかもしれない。

小さな歯はちつとも痛くないが。

「躾がなつてないぞ」

と、かみついてくる猫の顎をぐつと掴んで口の中に指を突っ込む。あがあがと慌てるさまが面白い。

「きひひひひ、苛めちやつれお」

猫の扱いなら任せろ！

妙な自信を込めてにやつと笑い、膝の上に立たせるよつとして両手を掴み、肉球をぶにぶにと親指で押してみる。

「みやうううつ」

「ふふふ、いやだろお」

猫が必死に身をよじつて逃れようとするが、勿論そつはいかない。なんだか猫の癖に泣きそうな顔をしている。

「つづいてはお腹わしゃわしゃだぞー、我慢できなくなっちゃうぞ

ー

白くて丸い可愛いお腹に手をかけてわしゃわしゃと動かすと、必死に猫キックを繰り出してくる。

小さな足で蹴られたところで何ら実害は無し。

「ふしゅーっ」

「くくく、尻尾があつきくなっちゃってかわいいなあ

興奮のあまり尻尾が空気をはらんでふくれた。

子猫は必死に抵抗するも撃沈。

室内のそこかしこで副隊長の暴挙に含み笑いや呆れたような笑いがおこるが、クエイドはすでに興が乗っている為止まらない。

耳をひっぱり、鬚をひっぱり、中指と人差し指の間で猫の小さな舌を挟んで爆笑する。

確実に猫に嫌われるタイプである。

だが当人は可愛がつてていると思つてゐるが、それとも苛めてゐる自覚があるのか、口から「せひひひひ」と奇怪な声を漏らす。

「知つてるかあい子猫ちゃあん、にゃんこの性感帯は尻尾の付け根

え

「何をしているんだ！」

突然力いっぱい頭を殴られた。

「つづの子に触るな！」

いつの間に戻ったのか、ロイズ・ロックがクエイドの膝の上の猫をひつたくり、猫もやつと現れた主に必死にしがみつく。

「みやう、みやううう」

「その声がはげしく哀れだ。

「ううう、痛い。

ひどいつすよ隊長。ちょっとした御茶目じやないですか」

「おまえは一度と触るな、近づくな」

「いや、そんなマジな目しないで下をこよ?」

その田で外を行けばモーセの如く人々は道をあけますよ…慣れているといえどほんの少し汗まで流れた。

ロイズ・ロックは自分の胸にしがみついて涙田になつてこむ猫の頭を撫でて、

「うじいつも」

と不機嫌をあらわにしている。

「そもそも、今回はどうしたんですか、猫連れてきて」

「所長が連れて来いとこいつから連れてきたら」

忌々しそうに舌打ちする。

「倉庫にネズミがいるから猫を入れておけとかふざけたことを。あのタヌキ親父が」

「……いいじゃないですか」

猫なんてそんなものだ。

猫を飼う理由の一一番がネズミ避けなのだから。

ある意味じこくまつとうといえる。

「ネズミなんて食べて病気になつたらどうする」

ネズミ捕りをさせたいなら自分の家の猫を使えーといきまく相手に、「いや、あの倉庫だつたらすでに所長の猫が一匹入れられてるでしょ

黒いのが。

クエイドが苦笑しながら言えば、益々もつてロイズは不機嫌そうに

クエイドを睨んだ。

「完全に駄目じゃないか！」

なんで駄目なのか、その原因はクエイドには理解できなかつたが、
とりあえず一つだけ判つたことがある。

我らが隊長殿は極度の猫フエチに違ひない。

クエイドと猫（後書き）

クエイドは動物が大好きですが、動物はクエイドが嫌いです。

「事件です！」

クエイドはその剣幕に恐れをなした。

「えつと……はい？」

「クエイドさん、大変なんですっ」

エプロン姿の女性の姿に、クエイドは見巡り中の足を止めた。栗色のゆるいウェーブのかかる髪を三つ編みに結い上げ、頭の上方でとめている侍女服のその女性は、彼の上官の家の使用人であることは承知している。

「いないんです！」

「え、ああ……連絡はした筈なんすけどねえ。 irechigattaかな」やつと納得する。

「隊長なら富廷魔女の……なんつたかな、ああ、レイリッシュ様？に拉致られちゃいましてね。なんか数口貸し出されていきましたよ？」

不憫すよねえ。

のほほんと言いながら肩をすくめる。

あのときのことを思い出すと笑ってしまう。

隊舎の執務机に向かっていたロイズ・ロックの後ろに突然魔女が出現したと思うと、彼女はロイズの襟首を掴み上げ、

「はい、これ！」

と、くるりと巻かれた羊皮紙なんぞを突き出した。

ロイズは目を見開いていたが、慌ててその巻紙を開いて内容を確認。しかし魔女はといえば、啞然としている彼の部下一同を舐めるように見やり、につこりと微笑んだ。

「しばらくコレ借りておくから、ちやんと上の人にも言つておくか

「ら

言いたいことを言いつ切り、

「じゃあ」

という言葉と共に

我等が隊長殿は空間転移の巻き添えを食つた。

完全な拉致だつた。

魔女は完全犯罪が可能だ。

「若様じゃありません！」

侍女殿はぶんぶんと首をふり、

泣きそうな声で叫ぶ。

「猫です」

「はい？」

「うちの猫しりませんかっ」

「いや、知らないスよ」

「いないんです。屋敷中を探したのに、いないんです。うちの犬にも見つけられないみたいでつ」

ぐわしと上着をつかまれてクエイドは引きつった。

「どうしましょうつ」

「いや、猫なんてすぐ帰つてくるでしょ？

あの白い猫ですよね？ あの……えつと」

そういうえば名前を聞いたことがない。

「はい、うちのブランちゃん」

「ブラン……ちゃん？」

「ブランマージュとこいつ名前なんですね」

それは探していいんだらうか。

頭の中で一場面が展開する。どうせ隊舎の中には暇な人間が山といふ。元々平和を描いたような場所だ、猫を探して来いといえば「めんどくせー」と言いつつも、何かのついでに第一隊の人間たちは動いてくれるだらう。

「で、名前は？」

「ブランマージュ」

場が凍りつくりと確定だ。

何故あの猫の名前がブランマージュなのだ。よりこもよつて、ブランマージュ。

それは警備隊の人間達にとつて最も鄙まわしき名ではないか。

「もしかして隊長、可愛がつてゐるフリして結構猫を相手にストレス発散？　いじめてるとか？」

思わずぼそりと言葉が口から落ちた。

途端に侍女の目がカツと見開かれた。

「そんな訳ないじゃないですかっ！」

若様はそれはそれはブランちゃんを可愛がつてゐるんですよ！　いつも御風呂にだつて一緒に入つてゐるし、寝る時だつて一緒になんです。ブランちゃんがくしゃみでもしたら大騒ぎなんですよ！　うちの若様はブランちゃんを苛めたりなんてしてませんっ！」

「……」

「そのブランちゃんが若様の居ない時に家出なんて。私、私どうじたらいいかつ」

「……」

「聞いてますか？」

ギッと睨まれ、クエイドは乾いた笑いを浮かべてしまつた。

「聞いてます。あの、ですね　オレが探しますから、とりあえず猫の「トトは任せ下さい。おたくさんは自宅でのんびりと待つて。できればその話は一切しない方向で」

「なんですか？」

「いや、うん」

隊長の男としての何かが完全粉碎されそうだから。もし強制出張から帰宅してこの話が町中に広まつていたらと思つて恐ろしい。同じ男として！

自分ならば立ち直れない。

猫と風呂に入り猫と寝る……拳句その猫の名前が「プランマージュ」。隊長、不憫すぎる。

「とにかく、猫なんてすぐに出てきますって。確かあの猫つてば魔道具の首輪してましたよね？ 最悪魔道師に頼めばすぐに見つかりますから、あんたは少し落ち着いて自宅で待つてくださいよ。隊長が戻ってくる頃までにはなんとかしますから」

余計なことは一切言わずに！

宥めてすかして自宅まで送り届け、クエイドはがしがしと頭をかいだ。

とりあえず凄いネタみつけ。

いやいやいや、このネタは自分の首も絞めるかもしない。
保留。もしくは封印しておこう。

クエイドは保身もできる完璧な男であった。

迷子の子猫（後書き）

言ひやめ田だ（笑）

「まつたく、しめっぽい子だね」呆れたようなエリィファイアの言葉に、使い魔であるシュオンは更に溜息を吐き出した。

その手には黒いサテンの生地。

愛する主の為に今日もせつせと縫い物に興じている。

「行けばよかつたじゃないか」

使い魔の主は現在始原の森という場所に派遣されている。容易く行ける場所ではないため、居残りの使い魔にとつては辛い。

行けばよかつた。

行けるものならそつしたい。

だが、阻むものがあった。

心が。

「だつて、ぼく魔道師の姿なんです」

しゅんつと肩が落ちる。

「それが？」

「魔道師の姿だから、魔道師が一緒に人形の姿に変化できないんです。怒るから」

「別に蝙蝠でもいいじゃないか」

「……蝙蝠だと、もっと役立たずじゃないですかー」

蝙蝠は自分が役立たずな使い魔だと熟知している。

できることといえば、家事と人の形がされること。家事だって、ブランの為に必死に覚えたものだ。

簡単な魔法だって……本当に簡単なものしかできない。

一族の中でもつまはじきだった程なのだ。

「それに、魔道師だけならともかく 警備隊長も一緒にレイ

リッシュ様が言っていたから

声のトーンと視線が落ちる。

「ぼく……あの人嫌いだから」

エイルは勿論キレイだ。

だが ロイズへ向けるキレイは、日々でかくなる。

「なんだい？」

「……」

縫い物をする手が止まる。

自分をうかがうエリィフィアの言葉に、言葉が濁る。

「……マスターが

「あの莫迦娘が？」

「最近、ロイズさんの邸宅のことを、うつりて、言つんですね
「は？」

「飯、うちに食べる。

その言葉は、きっと無意識から出ている。

うちに帰る。

うちの人。

……あんな言葉は聞きたくない。

マスターの自宅はこの森にある小さな家。

うちと称されるのはソコのハズで、うちの人と言われるべきは自分のハズで。

「マスターは、ぼくの

エリィフィアが呆れたように大きく溜息を吐き出す。

今にも泣きそうな使い魔の頭を乱暴にがしがしどかき混ぜ、
「まったく本当に難儀な子だね。

レイリッシュに相談してやろうかい？ あたし一人では無理でも、レイリッシュも加わればあなたの歪められた魔法を解くことが、その言葉を、使い魔が慌てて遮った。

「駄目です！ 駄目っ！」

「蝙蝠？」

「……駄目です。イヤだけど……絶対にイヤだけど、これがぼくとマスターの最後の魔法かもしれない。それなら、解いては駄目ですっ」

切羽詰るようごに詰つ青年に、更にエリイフィアの溜息は深くなる。「本当に、あなたは」

溜息を落とした頬が歪み、口元に笑みを刻む。

「あんた程いい使い魔はないさ」

その言葉に、部屋の片隅で自分の羽根の手入れをしていた白いオウム エリイフィアの使い魔が抗議するように鳴いた。

警備隊第一隊が魔女の被害にあわない理由

「理不尽だ」

始末書の束を前に、ロイズ・ロックは低く唸つた。

「まあまあ、落ち着いて」

「これがおちついていられるか。何故、あの魔女の被害がうちの隊にばかり集中しているんだ」

ロイズ・ロック、任地について一年と半分。

日々下らない魔女との追いかけっこに銃を抜いた数が一桁 それも全て始末書が証明している。

「あー、そりや……」

ロイズの隊の副隊長であるクエイドは苦笑して頭をかいた。
「第一隊にはギャンツさんがいるから

「は？」

ギャンツ・テイラ―の名前は勿論知っている。第一隊の隊長だ。会議などで顔を良く合わせる相手でもある。生真面目で温厚。理想的な上司といふところだろう。

「あの人気が何だ？」

「……オレが言つよりも、自分で確かめたほうが早いですよ。あの人の前で魔女殿の話題をふつてみて下さいよ」
クエイドは苦笑し、肩をすくめた。

眉間に皺を刻みつつ、それでも魔女対策を知りたいロイズは部下の言葉に従い第一隊の隊長であるギャンツを馬屋で捕まえた。

「ギャンツ隊長

「ああ、ロックか。何か用かい？」

愛馬の腹にブラシを掛けっていた男が柔らかな笑みを浮かべて尋ねてくる。

爽やかで柔らかな物腰。いつ見てもこの相手は素晴らしい上司の鏡

である。ロイズにとつても田標だ。

ロイズは「すみません」と前置きし、

「ブランマージュの……」と言葉を続けた。

途端、ギャンツはぐるつと鼻のように首をめぐりせり、瞳を見開き、
ブラシを強く握りこんだままロイズのシャツをつかみあげた。

「ブランマージュが何だと？」

「」

「……だ？ どこにいるんだ？ 最近はひつともお会いしていない、
おまえは何を知っているんだ！」

やーっと血の気が引いた。

強い力でがんがんと揺らされる。

「私のブランマージュはこいつたいじこしているんだーっつ

「つじ口上で、魔女殿は第一隊の前には立てないんですよ

「……」

「隊長？」

「 オレの、オレの理想の上司が……」

襟首を締め上げられ、がくがくと揺らされたロイズは頭を抱えてし
ばらぐふつぶつと呟き続けるはめになつた。

「ブランマージュー 私の天使。私を激しく罵つてくれ。私の何が

イヤなんだつ

耳の奥で木靈する呪いの言葉をなんとかしてくれ。

警備隊第一隊が魔女の被害にあわない理由（後書き）

何故第二隊ばかりなのか！ その理由はプランが怯えているからでした。元々はギャンツさんは素晴らしい人でしたが、プランの悪さが講じて蹴りを一発御見舞いししてしまったところ、どうやらギャンツさんの何かのスイッチが入った模様。普段のギャンツさんはいい人です。

魔女の罠？

「おや、久しぶり」

クエイドは片眉を跳ね上げるよひにじて皮肉な笑みを浮かべた。

「あら、副隊長

とはブランマージュ。

「また悪さを企んでるのかな？」

「そんなことはないわよ？」

と笑うその口元は実際に嬉しそうにゆがんでいる。何かを確實に企んでいるのだろう。

クエイドはちらりと背後を確認し、ちょいちょいと指先でブランマージュを招いた。

「ちょっと

「なあに？」

「あのね」

すすすっと身を寄せてくる魔女にヒーリングと笑い、腰にある白い魔道用のロープで手早くその手首を戒める。

「なにすんの？」

「ギャンツ隊長…」ヒーリングとブランマージュ

言つた途端にブランマージュが暴れだす。自分を捕らえた魔道具をぐいぐいひくが、引けば引くほど絞まるのだと教えたほうがいいだらうか？

「いやつ、やだつ、離してつ」

そんな魔道具など魔女ならばすぐに解くことができそうだといつに、パニックを起こした魔女は半泣きの瞳でロープを解こうとしている。

「ブランはどうだつて？」

先ほど道端ですれ違つたギャンツが足音も高く近づいてくる。

クエイドは自分の隣でもがいでいる魔女の姿に顔をしかめ、ぐ

つと抱き込むよにして近くの建物の隙間に入り込み、ブランマージュの口を塞いだ。

「ふつ、んんつ」

「「めんね。悪かった 静かにしておいで」

ほんの意趣返しのつもりだった。

ブランマージュがギャンツを苦手としているのは周知のことであるから。悪さばかりするブランマージュを多少懲らしめてやろうとしたのだが。

泣かせる気は無かつた。

腕の中で涙交じりで震えている魔女に、途方にくれてしまう。いつだつたか、ギャンツに捕まりそうになつて腰を抜かしたこともあるつたつけ。

相当、ギャンツが怖いのだろう 完全に怯えている。

狭い場で左肩を壁に触れさせ、腕の中でふるえる魔女を宥めるように苦笑を落とす。

「ほり、じつとして。ロープといてやるから」

「ふえつ」

まだ涙声しかでないようだ。

参った 悪いことをした氣になるじゃないか。

嘆息していると、ふいに背後から声がかけられた。

「クエイドか？ そんなところで何をしていろ？」

「……」

「勤務時間内に女を暗がりに連れ込んで」

「あ、ロイズ」

相手にはクエイドの背中と、そしてもう一人の影があることしか見えていないだろう。

しかし、今小ちくブランマージュが呟いた言葉をあの地獄耳は聞き入れただろうか？

だらだらといやな汗が流れる。

腕の中には半泣きの魔女。

その手は捕縛用のロープに囚われている。

……もしかして史上最大のピンチですか、オレ？

御礼多謝！（イラスト入り小話）

「たまには外に出してあげないと可哀想ですよ！」

ロイズの休暇、寝椅子に座り銃の手入れをしていたロイズに侍女が言つた。

「外は危ないだろう」

「だつたら若様が見ていて差し上げたらいいじゃありませんか」

ロイズは眉を潜め、寝椅子の端で香箱座りのあたしをちらりと見ると、観念した様子で銃をテーブルへと戻した。

「庭先ならいいか」

その手が伸びてあたしを抱き上げる。

別にね、外なんてどうでもいいのよ。あんたが仕事の時は毎日あたしは外に行つてるから。

太陽と仲良くなしたい質クチでもないしね。

> i 5 8 6 9 — 9 6 2 <

まあ、たまにはあんたに付き合つてあげたつていいわよ？

そもそも休日のあんたときたらちつとも外に行かないじゃない？

ちょっとくらいは遊んであげたつていいのよ？

最近のあたしときたら本当に眠くて参っちゃつ。

猫の習性つてヤツなんかしらね。

どこにいても眠れるし、ちょっとやそつとじや起きない感じ。

寝椅子でくつたりと体を沈めるあたしを、誰かの手がそつと持ち上げる。

柔らかくてあつたかい場所……気持ちいい。

深い場所にとろとろと落ちていく。

心臓の音が伝わって、安堵感が広がっていく。
あたしはすうっと深い眠りに落ちていく。

誰か知らないけど、おやすみなさい。

♪ 5870 — 962 ♪

イラストを頂きました！

猫ブランとロイズ、そしてチビ魔女ブランとエイルです！
あんまり有頂天でやくしゃくしゃになります。

尚、小話は後付けですので、イラストを揃なつてしまっているかも
されません。
スミマセン。

サイト【納豆に青じる】<http://nattoniaojiru-web.fc2.com/>のアサゲ様より頂きました。
サイト上にもうまれていらっしゃいます。

アサゲ様、この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。
尚、もし他にイラストをかけて下せる方がいらっしゃいましたら、
連絡下さいね。

ちなみに私の方向性として　ノーマルでお願いします。

web拍手お礼小話つめつめ（一）（証書を）

もつすでに読んでいる方もいると思いますが、web拍手の小話詰め込みです。

*期間限定だったハイブリッドホールはまたそのうち。。。

『めでおれ小説つむぐ（一）

「わあ～ ハンショーンあがるわ！」
「ブランひぬれ～」
「だつてハイバル～ 抱きしてもらつたのよ、あんたもお礼ひとけ
なさい」
「……」
「……」
「やあね、いつのダーリンいつまでも黙れ座れとびいぬくねえ」
「でもひさと躊躇つてみ、ハレドヰ」
「ブラン」
「なに？」
「おまえの年齢を尋ねて欲しげか？」
「あんたよつね年齡トモーーー。」

「あたしな、あんたに聞こたい」とがつたのよー。あたのよー。
常々ずっとね。

あたしはロイズ・ロックと視線を合はわせ、真面目な口調で切り出した。
ロイズが少し驚いたよう元氣を引きながら、それでもひさとあた
しを見る。

こちりの真剣をがきつと伝わったに違いない。

「なんだ？」

少しつづつしたような口調。

あたしは少しだけ、そう、ほんの少しだけ恥んで、けれど胸に切っ

て告げた。

「あんた絶対にハゲると思ひの」

「……」

「家族はどうなの？ 父親やおじいちゃんは、ねえ」「どうなのよ？」

「言いたい」とはそれだけか？」

あれ？ なんで怒るのよ？

あたし本氣で心配してるのよー？

「ふふ、可愛い」

白い猫が身を丸めてソファで眠る。

もう見慣れたその光景。

見ていろだけで心がなごんで自然と笑みが浮かんでしまう。

「ブランちゃん」

頭を撫でてやると、ぐらぐらと気持ちよさそうに喉を鳴らす。

最近は毎晩のうちにどこか気に入りの場所を見つめたのが姿を見せない。

けれど夕方を過ぎる頃にはいつの間にかソファの上で眠っているのだ。

「若様がこんなに猫好きになるとま思わなかつたけれど」

思わず苦笑がもれる。

猫に構うよりも自身の結婚のことについてもつと身を入れてもうこたいと切実に思うのだが……

「……なんか無理そうよねえ」

猫にブランマージュなんてつけてる時点で黙田だわ。

「みやづ..」

「重ね合わせるのみえみえなんだもの。困つやけつけわね？」

「ひや？」

「ふふ、おまえは悪くないわよー？」

「マスター」

「なに？」

「拍手してもうれましたー」

「うんうん、お礼言ひておきなさこ」

「嬉しいです、ありがとうござりますー」

「どれくらい嬉しいかって言いつと、マスターの入ったあの御風呂に入った時くらい嬉しいですー。」

「.....」

「あ、それともマスターの使ったXXをヒツリXXした時かも」

「いやいや、もしかしたら」

「あ、ロイズ？ 悪いんだけどあなたの銃貸してくんない？」

「呼びつけで」「めんなさいね？」

漆黒の魔女は唇を歪めて微笑んだ。

「その後どうかしら？」

楽しそうな眼差しに晒され、呼び出されたものは萎縮したように視線を下げた。

「ええ、それは知ってるわよ？」

可愛い子猫は毛を逆立てて御仕事に励んでる

くすりと笑みがこぼれた。

「でも、大事なのはそれではないでしょう?
それはあくまでもおまけ。

このままではあの子猫は本当に猫になってしまひやう?」

ふふふ。

「怒つているのね?
でもこれもまた罰なのよ。仕方ないわね?」

漆黒の魔女は艶やかな髪に指をからめ、そつと血の匂いに寄せた。

「早く体が見つかるといいわね?」

ふふふ、駄目よ。ヒントはあげない。

でも時間はそんなにないのよ? このまま猫の体に留めおくことでも、難しい。だって、あの魂は魔力があるのですもの。

そんなものにずっと猫の体が堪えられるなんて、それは無理

「あたくし達魔女は力あるもの。
だからこそ、根底にある秩序を守らねばならない。

これは特別な処置なのよ?

あの子は特別 何が特別か? それくらいは教えてさしあげてもよくてよ?」

漆黒の魔女は実に楽しそうに笑い、

「魔女ブランマージュが年若く、そして愚かだとこいつによ

と続けた。

ブランマージュがソファで寝るのはこつものことだ。
だが、いつもと違うのはそれが猫の姿であるから。

「……」

エイル・ベイザッハは灰黒の瞳を半眼に伏せ、白い猫を見下ろした。
蝙蝠はまだいない。あれは時折姿を消しては夕方に戻り、猫に変化
したブランをロイズ・ロックの邸宅へと運ぶのだ。

エイルの手がすっと白い猫の体毛に触れる。

手入れの行き届いた毛並みは柔らかく艶やかに指先に伝わる。

「……」

寝ぼけた猫がほんの少し顔をあげ、するりと指先に顔を押し付ける。
それに少しだけ動搖を見せたエイルだが、次の瞬間、
猫に指先を噛まれた。

「つ

「この肉まついーっ

むにゃむしゃという猫をおもむろに摘み上げ、エイルはぐず入れの
中に放り込んだ。

「なんでマスター、ゴミ箱で寝てるんですかあ

「知らないわよっ

「……だけの話しながらですが、うちのマスターは実は結構怖がりで

す

「はい。何かの拍子でアンデットとか見てしまったし、寝れなくなつちやうんです」

「魔物とかは結構平氣ですか、幽靈とか溶けてる系とかの類が駄目なんです」

「夜寝る前に、ちょっと幽靈の話しなんかすると、決まって夜は寝れないと」

「だからそういう時は、しばらくひそりと眺めるんです」

「寝台で枕を抱きしめて寝返りを何度もうつて、眉を寄せて布団の中に潜り込んだりして」

「堪えられなくなつてぼくを呼んでくれるのを待つんです」

「朝までマスターの頭をずっと撫でてあげるんですよー、ぼく夜行性だからそういうの平氣なんです」

これは滅ぼしてしまつたほうがいいんじゃないだろうか？

ロイズ・ロックは腰の短銃をそつと撫でた。

「たいへんよロイズ！」

「……」

「なによ、ノリが悪いわね？」

「おまえのタイヘンだとかは信用ならない」

「」

「口クなことがない」

「いやいや、こんかいはタイヘンなのよー！」

あたしあぐつと拳を強く握り締めた。

「web拍手を設置して判つた大事件よー！」

「なんだ？」

「あんた人気ない！」

「……」

「エイル大人気！ しかもあたしなんて可愛いとか言われてるわっ。
いやん、あたしつてば可愛い！」

あら？

ロイズさん？

大きな体で隅つちょにいつたつて見えてますよ？ あんたでかいんだから。

ろーいーすさーん？

「あ、ちゃんと一人いたよ？ ロイズ派つて人が」

あああ、なんか更に落ち込んだ？
あまりにも実質的な人数だつたか。

「んー？」

ロイズは猫フェチで熊男で将来ハゲ確定だけどいいヤツよ？
あたしが保障するから

「おまえがそーいうことを言うからだろうが！

それにオレの身内にハゲはいない！ 今だつてハゲでないつ
つて、それはそれでハゲの人に失礼よ。世の中にはダンディなハゲ
がいるのよ。

「おまえがろくでもないことを垂れ流しているのが悪い！」

えええええ？ あたしのせい？

あたしのせいなの？

「うつ」

隊舎の倉庫をあけてロイズ・ロックは呟いた。

黒い猫が「なー」と鳴く。

「ああ、所長のトコの口でしょ」

副隊長が呑気に言いながら猫の頭を撫でる。

「まだネズミ捕りさせられてんのかー？」

「……」

ひょいと抱き上げ、ずいとロイズへと向けた。

「隊長猫好きでしょ」

「」

「ああ、こいつオスなんだ」

ひょいととのぞきこみ雌雄を判別すると、副隊長は嬉しそうに言つ。

「隊長のトコの猫の御嬢さんにどうすか？」

「絶対に駄目だ！」

「……娘を嫁にやる父親スカ、あんた」

エイルに頭から湯をかけられた！

ぐつしょりと濡れたのは何も髪だけではない。

「いやー、耳の中水うつ」

猫の耳の中に水分をいれるとは何事だ！ なんかヘン、なんかおかしい。すんごい違和感。

うわー、エイルの馬鹿あ。

「どうした？」

黙々と銃の手入れをしていたロイズが眉間に皺を刻む。

エイルは現在あたしと交替で入浴タイムだが、ああ、むかつく！

「猫耳の中に水が入つた！ なんかもわーんつてするつ」

「……だから、どうなつてるんだその耳」

呆れたように言うが、そんなのこっちが知りたいよ。

あたしだって好きで猫耳なんてつけてるんじゃないんだよ。不可抗力なんだ。抵抗できるものであればとっくの昔にどうにかしている。

「見てやるから、来い」

とんとんと膝の上を示される。あたしは溜息を吐き出しその膝に座った。

「こら、耳を伏せるな。伏せてたら見れないだろ？」
「だからソレは勝手に動くのよ！」

あたしの意思で動かすというよりも、このけの意思とは無関係に動く割合のほうが強い。使い魔に言わせると、あたしの気持ちで伏せたり立つたりするらしいが、それは完全なる無意識だ。

「右か？ 左か？」

「左」

ぐいっと耳が引かれて無理矢理起こされる。

掴まれるとあたしは微妙な気持ちになつて身をすぼめた。

「しめつてる」

「耳元で喋るな！」

「ああ、やっぱコレは耳なんだ……おまえ本当にじどんな創りしてんだ？」

しらないつではば。

「そういうえば、Hイルの実験体にされでござるって噂もあつたな……まさか」

「いやいや、それはないから」

「そうか。良かつた」

言しながらロイズが耳の中にふつと息を吹き込んだ。

「ふぎやうつ」

「耳通つたか？」

「まだだよ！ このバカー」

「そうか んじや、拭う？」

自分の言葉に疑問符をつけて、やれやれと人の耳を拭おうとしたとハンカチを突っ込んでくる。

「ぬおうつ」

「あ、痛かつたか？」

いがいに纖細なのだよ、その耳。

「そもそもなんで猫耳なんだよ」

いや、それは突っ込まないでよ。

そこは突っ込んじゃ駄目なトコだからさ。

「白いし」

「……」

「ああ、うちの猫も白いな」

いやあ、その話題は駄目だつて。
まずいですよ。

えつと、えつと。違う話題に転化、転化させねば。
ふいにロイズがふつと笑う。

「おまえも知つてゐるだろ。うちの猫」
でた！

猫フェチの猫白慢！

まったく猫好きつてヤツは、自分の猫を白慢したがるのよ。
辞めてよね！ それをあたしに言つのはとくにつ！
こいつばずかしくなつちやうじやなこのつ。これでれになつ……

「うちの猫性格悪くてな」

「……は？」

「よく噛み付いてくるし。ひつかいてくるし、本を読んでも邪魔
していくるし」

「……」

「人間が食べるものばっかり欲しがるし」

……なんだらうね、このフツフツくるものは。

普通はさ、猫フェチつていうのは自分の猫を褒め称えてどれだけ可
愛いかを無駄にアピールするものじやないのか？
褒めるよ。

おまえの可愛い猫を褒めたたえる。このぼけ熊めつ。
可愛い可愛い白猫ブランマージュを褒めなさいよお。こいつちが照れ
て鳥肌たつくらー！

「何か企んでる顔してるとしなー」

「……へええ」

「なんかおまえこそくつだよ」
あたしだよ！

「ほり、もう平氣か？」
「」

「ブランマー・ジユ？」

不思議そつに覗き込んでくる男で、あたしはこいつと微笑み返した。

許すまじ！

猫フェチの分際で！－！－

絶対に報復してやるからな！

覚えてろつ。

web相手お礼小話つめつけ（2）

「ふふーん。勝った方が相手の言づけを利くべしでどうだつ」とことじとで、ロイズバーブランマージュしつとり大会。

「当然あたしからでーす！」

りんご」

ふふふ、しりとり、が先だと思つたら大間違いだよん。

「いはん」

「……はい？」

「いはん」

「あんた莫迦ですか！？」

しりとりはんがついたら負けなのよ、あんた負け！」

「判つたから早く言え。なんでも言づけと利いてやるのだ」

「……」

ものぐつやつまらん！……！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「勝つたほうが相手の言づけとを利くべし。しりとり大会第一回ー」とことじとで、エイルバーブランマージュしつとり大会。

「当然あたしからでーす！」

しりとり

今回はノーマルに、り、から。

「料理」

おお、エイルつてばまともに返答したわね！

偉ござ。

「つすぐるー。」

「瑠璃」

「リップスタイル」

「クスリ」

「リ」

「リ、リ、リス。さつきはリストアから、今度はリス！」

「スリ」

「リーリー」

「降参は負けだからな」

腕を組んでニヤリと口角をあげてみせるエイル。

「リボ……じゃなくて、リ、リ」

リボンも離婚も駄目だあ。

「さて、何をしてもらおうか
もしかしてピンチか！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「アン、アンニーナー！」

突然の来訪者であるブランマーージュの声に、寝台からむくつヒanke
ニーナが顔を上げる。

その身にまとうのは薔薇の香りのみ。

顔に張り付く紫の髪をかきあげ、アンニーナはあふりと欠伸を噛み
殺した。

「朝早くからなによ？」

「もう寝近いわよ」

「だあつてあたしのホンバンは夜だもの」

「……」

ブランマーージュは引きつりながら、

「あなたに聞かたい」とがあるのよ。」

と告げた。

「何よ?」

「言いたくないけど、最近のあたしときたらめつきつ悪い魔女として何がが間違つてゐるのよ。」

「ふーん?」

「だから、先輩悪い魔女としてちょっと教えてもらいたいの。なんというか、悪い魔女としての「ソジ」というか、心得つて、いうか? ブランマージュの言葉にあふりと欠伸を噛み殺し、アンニーナは瞳を細めた。

「誰が悪い魔女だつて?」

「え?」

「いつとくけど、あたしは善い魔女だから」

「……は?」

ブランマージュは光の角度で金色に見える琥珀の眼差しを見開いた。

「あたしはー、悪い魔女じやないから」

「……どのくんが善い魔女?」

四六時中色欲にふけりまくつゝ、男に貢がせて好き勝手している魔女が、善い魔女?

「あたしはー、自分の欲望にすなおーな良い魔女なの。

欲しいものはくれる人から貰うしね。男と遊びたければ遊ぶの一。あたしはー、判りやすい善い魔女よ?」

ん一つと体を伸ばし、やつと田を覚ました様子のアンニーナはぐいっと手を伸ばしてブランマージュの腕を引いた。

「きやあつ

「ほり、あんたも遊ぼう!」

誰かっ、出でいで。可愛い子猫ちゃんの相手をしてあげて

「ちよつ、やめつ、離してええつ」

「ふふふ、人生は楽しむものよ?」

「はーなーせえええ」

ブランマージュ、ドーン。

ふわりと降り立つた黒い魔女の姿に、真っ白い一角獸は冷たい眼差しを向いた。

相手は美しい女だつた。

引き結んだ口元も、意思の強そうな眼差しも、艶やかな黒髪には魔女特有の三角帽子をかぶり、その気配は強さに満ちていた。

「おいで」
轟は仰ぐ歎嘆の一には歯を打た鳴らす

魔女は笑ひ

「ふふ、生意氣で素敵ね？」

魔女が手のひらをひらめかせれば、一角獣の体がびしりと強張る。しかし、それを身を振ることで解く。

「ああ、本当に素敵……」

魔女は吐息を落とし、おひへいひへいひへい

「お世話をあがめる」の他の二つの

ひとつとりするよつな口調で魔女が囁く。甘く、吐息を含ませて。

伸びた手が、一角獣の鼻面に触れる。

噏み付けていたのを押さえる歓で魔女は顔を寄せた。

「おめでたす」

-

「JRのレイワシシゴの全てをおまえにあげるわ！」

ふつと一角獣の姿が馬のそれから人の形へと変わる。嬉しそうに微笑む魔女は、自らの口唇を爪先でなぞり、血で滲ませた。

二人の唇が触れ合う　それが、契約。

月と魔女の血のもとで、高潔な獣は魔女の軍門に下る。

「でもレイリック シュって他にも使い魔いるよね？」

「いるわよ？」

「……他のも同じ手口で手に入れる？」

「そりやそうよ。強い魔物や靈獸は矜持が高いもの。でもね、使い魔にしちゃえば魔女の勝ちよ。結局は逆らえないんだから」
アンニーナから聞かされたレイリック シュと一角獣の話に、ブランマージュはほんのちょっとだけ一角獣に同情した。
同情が一割。残りはちょっと……まあみろ？

えいぶつるふーる（web拍手小話）（前書き）

4/1に一日だけweb拍手のお礼用として書いた小話です。
一月たちましたのでup。

えいふりるふーる（Web拍手小話）

「ロイズ、今まで意地悪ばっかりしていたけど……

あたし、本当は
」

こくりと喉が上下する。

伏せた眼差しをそつとあげて、

「あなたの」と

「ブラン」

卷之三

「ブラン！」

卷之三

傳聞力

1

あれこれ

壁になーいでどうしたね？

4月1日えいぱりるふーる。

エイル。今まで意地悪はつかりしていたけれど……

おたし
スミは

上巻

伏せた眼差しをそっとあけて 小首を心持せ傾けて

あなたの「こと」

一
なん
だ

好きなの

伏せていた顔を上げたとたん、いがいに近い距離にエイルの顔を見
て、あたしは息を詰めた。

「え、あ……、あ、信じた？」 信じた？あの

「黙れ」

つて、あの、ちょっと、近いって。

何故あたしの頬に手を当てる。何故腰に手をまわす。
うらやましい、待て。

「わーん、冗談です！」

エイプリルフールです。嘘ですうつ

卷之三

「四田馬鹿か。なあびよこれも……
戯事だ
あれ」と

፩፻፲፭

4 / 1えいふじゆふーる。

* * * * *

「ショオン。今まで意地悪ばつかりしていたけれど……あたし、本当に

「ぐりと喉が上下する。

「あなたのこと」

「マスター？」

「好きなの」

にこにこと使い魔。

「おお、ハハと抱きしめられる。」

「國くモハアタリ大好也です。」

「マスター？」

卷之二

「お腹すいた」

「はい、今日はサバですよー。サバの焼き物。サバのパイもあります」

す

嬉しそうに使い魔が頬を寄せてくるから、あたしは嘆息した。

「そうね、大好きよ シュオン」

4／1えいふりるふーる？

落とし穴のその後に

新任の隊長殿が着任して四日目

まあ、そろそろだろうとは思っていた。

クエイドはすぶぬれで隊舎に戻ったロイズ・ロックにタオルと着替えとを差し出した。

「お疲れ様です」

「随分と用意がいいな」

「いやあ、落ちたんすよね？」

落とし穴に。

クエイドはおろか、部下達全員が薄ら笑いを浮かべてしまう。

「だいたい一度や一度はやられるんスよ。この中で落ちた経験が無いのは一人もいませんから安心して下さー」

それは安心するところだろうか。

ロイズは慄然としながらタオルを受け取り、副隊長を睨んだ。

「判つていたなら何故言わない」

「落ちておかないとあとでもつと酷い目にあいますよ。」

「……」

「あれはブランマージュとここまして、この町の外れにある森に住む魔女です。まあ、言わざともお判りとは思いますがどね？」

「……」

「それに、先に告げ口するとブランマージュは告げ口した人間を標的にしますから、なかなかねえ？」

すでに一度進言したことがあるクエイドは肩をすくめるしかなり。

逆さ吊りに引き上げられ、トクトクと「つまんないじゃないか」と愚痴を聞かされたのだ。たまたものでは無い。

「みんなものが野放しなのか！」

「そうおっしゃいましてもね、相手は魔女ですしき

「魔女だからって許されてたまるか」

いきなり憤りを撒き散らしながらくるりと踵を返す。その足が所長室へと向かうのを冷笑で見送り、もう届かない背に意味もなく声をかけた。

「うちの所長ブランマージュにことわり甘いつスよお」

そうではない。

この地域一帯の人間がブランマージュには甘い。文句をつけているのは警備隊の平隊員達ばかりだ。

実害を蒙っているのは彼等ばかりだから。

逆を言えば、それだけ恩恵があるということだ。

魔女がいる、という。

自然すらそれだけで温暖となる。大気は魔女を愛している。大地は魔女を支える。魔女がいるというだけで何かしらの恩恵が確かに与えられる。

他の大陸には血を好み民を虐げる魔女もいるという。それでも、恩恵の前にひれ伏す者が多くいる。自ら身を捧げる者達が。

「可愛いっちや可愛いけどねえ」

よその魔女よりは。

「ブラン？ どこに？」

廊下に上半身を乗り出して騒いだ為だろう、嬉々としてあらわれた

第一隊の隊長、ギャンツの姿にクエイドは、うつと呻いた。

「最近ちっとも見ないんだよ、どこにいた？」

「いや、どこかは」

「避けられてる気がする」

避けられますよ、いいですね？

第一隊をブランマージュが避けだしたのは数ヶ月前からだろう。

隊長のギャンツを苛め倒していたブランマージュに、突然「もつ」と言つたのを皮切りに立場が逆転したようだ。

ある意味スゴイ。

そういう作戦だらうといつ話もあるが。

「どうかそういう作戦であると信じたいが、このギャンツの様子を見る限り果てしなくあやしい。」

「見かけたら教えてくれ」

「はあ」

爽やかなギャンツを見送り、その病にそつと涙する。

「いるんだよな、時々ああやつて人生をあやまつちまうのが。

「行つた?」

「行きましたよつ……て、何してんすか、魔女殿」
ふいにとんつと肩に重みを感じてびくりと身がすべむ。

「ここは警備隊の隊舎ですよ」

「だつてさつき落とし穴に落としたからあ。せつと身を震わせて怒つてゐると思ったのよ。そういうのつて想像するのも樂しいけど、やつぱり見学するのが一番でしょ」

軽く肩に触れてふかりと浮かんでいる魔女の姿にクエイドは脱力した。

「趣味わりい」

「いやんもつと褒めて」

決して褒めていない。

「あんまうちの隊長苛めないで下さいよ。やりすぎて第一のギャンツさんになつたら困るのはあんたでしょ」

「うわー、イヤなこと言うわね。副隊長」

「まだ数日しか一緒にいませんが、眞面目な人っぽいですからね。そういうのは危ないですよ」

「そういうのをからかうのが楽しいのよ?」

「ふふふふと笑う魔女に溜息しかでない。」

その瞳がやけにきらきらと輝いているのは、新たな標的の出現に物凄く喜んでいるのだ。つい。

「実際に判りやすい。」

「あんたさあ」

「なによ」

「責任とつてギャンジさん御嬢に貰つてやつてよ。どう考へても悪いのは魔女殿なんだから」

「……昔のギャンだつたらいいけど、今のギャンは絶対にイヤ」

「うわっ、あんたスゲーヒテー」

呟いたところで、地底からの地響きかと思ひのような野太い声が割つた。

「魔女！ そこを動くなっ」

物凄い勢いで戻ってきたロイズの姿にブランマージュが嬉しそうに笑む。

あああ、眞面目な人間程駄目な選択するんだよなあ。

この魔女は放置するのが一番だといふのに。構えは構うほどおもしろがるのだから。

このときのクエイドの勘はある意味間違つていない。

web拍手お礼小話つめつめ（ω）

クロゼットの中に並んだ愛らしき衣装
ふわふわのパニエ、磨かれた靴。
レースが使われた白いシャツも、その全てが全て魔女ブランマージュの為のもの。

「どこを突っ込んでいいか判らないですよねえ」

「突っ込んだら駄目だろう」

エイル・ベイザッハの屋敷の使用人一人が嘆息しながら掃除をしている。

それまで空き部屋であった場所。

今は明らかに 女性、というか女の子の私室となるよう改造成されている。

「寝台まで用意したほうがいいんでしょうかね？」

「

「寝椅子は置くよ」と言われましたけどね」

「隣室にバスタブをいれると云う指示はあった

「じゃあ、せっぱり寝台も用意するべきでしょつかね」

「なあ

「なんですか？」

「……寝台、うちの田那様のト「使ひつてこう話だったりひとつある

よ、おまえ

「だから、突っ込んじや駄目だって」

びつからエイルの屋敷には、ブランマージュの為の部屋があるっぽい

！――

（二つの間に）

六

「いいにしてたか、ブラン？」

白い子猫を膝の上に抱き上げる

片手だけで持ち上がる。

「成長が少し遅いのかな……ちゃんと食べてないか？」
「グランのまゝではグレーメは理り不ふ解げません。舞二ばくのせ

「しないし」

侍女がくすくすと笑う。

嫌いなもの、何が嫌いなんだ？」

「やつですねー、残り物とか出すと途端にやつぽ向をますし、一般には揚げ餃子がうまい魚のアツレバが呑向かいがかかるやつ

たとえば人間が食べ残したものにスープをかけたりしたものは絶対に食べない。

匂いをかぐまでもなく、ぶいつとそつぽを向くのだ。

「何でも好き嫌いなく食べないと大きくなれないぞー？」

喉元を撫でながらロイズが言つたが、白猫ブランマージュはそっぽを向いてうつむきこく呻き声をした。

「もしかして自分のこと人間だと思つてゐるのかもしれませんね？」

くすくすと笑う声にロイスが苦笑する

「人間だつたら相当性格悪いぞ。良かつたな、猫で」
言つた途端に鼻先をかじられた。

「人間の言葉を理解してるみたいですよー、ブランちゃんかっこいんです」

「……理解してるならもう少し性格が丸くてもいいんじゃないか？」

シャーツと猫が威嚇してくるが、ロイズはそれをものともせずにぐりぐりと頭を撫でた。

「まあ、そこがいいんだが」「結局可憐いんですね」

猫フェチの猫好きツボは一般人にはあまり理解されない。

モジロウノシテハ相怒テシ

「ブランマージコ、懸念ばかりしてこなによ
キニは魔女なんだか！」

「かのじゆく語教を垂れる」

「魔女だから好き勝手なことをし

ふかりと瀧かんでササノシの斜め上に立地する。

「セーデル、夜一魔物を闘志ナリ

が悲鳴をあげたろう?」

そんなは悪い子はよんでないわよ」

「別にかじられた訳じゃないでしょー

「ブランマージュ」

つんつと横を向き、飛び去ろうとした魔女の足を、咄嗟につかむ。途端、驚いたブランマージュがバランスを崩し、あげくそのケリが

ギャンツの腹部にめり込んだ。

「うわっ、もおつ！ あんたが悪いんだからね！」このぼけなす

1

100

じさうと尻餅をついて腹部を押さえ込み、つむぐギャンツの姿に、
ブランマージュはだんだんと不安を覚える。ひつひつとその顔
を覗き込んだ。

「なによ、痛いの？」ギヤン？

הנִּמְלָאָה

な、
なに?
」

「はー？」

がしりとその腕がブランマージュの腕を引っつかんだ。

「もつと蹴ってくれ」

えええええ？ なに？ なんなの？ 何馬鹿なこと！ ちよ

一の馬鹿つ、ヘンタイつ

「ああ、ブランド、むつと繩ひでひ

「いやあああつ、気持ち悪いいいいつ

「あああ、すごい気持ちいい」

ギャンツさん、へんなスイッチが入った瞬間。

* * * * *

見てはいけないものが目の前にある。

勤続ン年、懸命な老家人はこくりと喉を上下させて息を飲んだ。

最近は定番となつてゐる魔女ブランマージュの為のテサートとお茶とを持参した男が目にしたのは、寝椅子で寝るブランマージュとそ

の傍らで同じく寝ている主。

エイル・ベイザッハ……

主が転寝をしている姿も珍しければ、その姿がまたスゴイ。エイルの膝の上には、猫耳猫尻尾といつ最近はやっと慣れてきた謎の格好の小さな魔女。

噂では、主が猫と魔女とを融合したとまで言われている。なんとオソロシイ。

その魔女殿が、主の膝を枕に寝ている。
ちらにオソロシイ。

一見すればとても微笑ましい光景に見える。

ブランマージュは愛らしい。

その傍らの青年も冷徹だのイロイロと言われてはいるが、見目だけは麗しい青年だ。

まるで一枚の絵のように……

その主の瞳がふっと、何のタメもなく開いた。

「
」

明日の朝日は拝めないかもしれない……手にもつ銀のプレートの上、固めたオレンジのゼリーがふるふると小刻みに震えていた。

家人の明日はどうちだ？

休暇申請

「半月！？」

突然休暇を申し出たロイズ・ロックに、さすがに所長はいい顔をしなかつた。確かに休みをとるよにとは進言していたが、明後日から半月休みたいなどといつ台詞にほいほいサインをするわけにはいかない。

「無理は承知です」
さらりと言われる。

「お願いします」

苦いものを噛むようにとんとんっと所長が机を指先で弾くと、横から声が掛けられた。

「いいじゃないですか。ロックは良く働いているし 先日だつて余計な仕事を任されていたでしょ？ いない間は私が第一隊のフオローもするし、副隊長だつている」

助成してくれたのは第一隊のギャンツ・ティラーだつた。爽やかな笑みでぽんつとロイズの肩を叩く。

その言葉に押され、やつと所長は肩をすくめて書類にサインをした。
「まあいい。急なことだから、今もつてている書類の整理だけはしておけよ。あ、そうだ。どこかに旅行か？ 猫はどうするんだ？ うちで預かるつか？」

「家人がいますから結構です」
「……少しば遊ばせろ」

つまらなそうに言いながら書類を手渡すと、ロイズ・ロックは丁寧に頭をさげた。

「ありがとうございます、ティラー隊長」

ロイズは受け取った書類をきちんとチックし、助成してくれたギヤンツに頭を下げる。

「気にしなくていいよ。それに」

「はい」

「どうも第一隊の見回りコースのほうがプランと遭遇率が高いみたいなんだよ。君がない間にプランとえるといいんだけど」微笑ながら言う相手に、ロイズは引きつった。

確実にそれは無い。

何故なら自分はそのプランマージュと旅行に行くのだ。

そう、プランマージュと旅行だ。

ぎゅっと書類を握りこみそうになり、慌てて手の力を弱めた。

自らの隊室へと戻り、机に座る。

机の上にある書類は多量だが、明日の昼までには済ませられるだろう。問題があるとすれば、プランマージュはチビ魔女であるということくらい。

「……」

しかも猫耳猫尻尾までついている。

いや、首輪 そう、チョーカーまで付いている。

それを思うと自然と口元が緩みそうで慌てて引き締めた。

魔女の首には以前からそういうのがついていた。以前ついていたものは黒いもので、あれは確かに一つの間にか無くなっていた。アクセサリーなら気まぐれに交換されるのだろう。だから、もしかしたら今もまた違うものをつけているかもしない。

だが、昨日再会した時に魔女がつけていたのは 自分の愛猫と同じ首輪、いやネックレスだった。

金色の縁取りの赤い首輪。中央に蒼い石がはめ込まれた綺麗なものだ。

彼女は何をもつてそんなものをつけてくれているのだろう。それともまったく何も考えていないのか。

考えてなさねつだ。

自己完結して、それでもやつぱり口元が緩む。

「……なんか気持ち悪いスよ」

机で書類の処理をしていると、副隊長であるクエイドが机の端に珈琲を置いた。

「何がだ」

思わず冷たく言えば、

「楽しそうなオーラが流れてます。今なら鼻歌が出ても不思議じやないぐらうに」

「……」

そうだるうか。

ロイズは慌てて身を引き締めた。

「クエイド」

「はい」

「オレ、明後日から休暇に入るからあとは頼む」

「げつ、なんですかソレ」

「半月程いなか。もし困つたことがあればティラー隊長に相談しろ」

「……まあ、長い休みとのうひつて所長も言つてましたしねえ。だからつて急すぎでしょうに」

「ああ、すまないな」

そういうながらも手元の書類から視線を外さない。

「プラン、……」

突然クエイドがぼそりといい、ロイズはビリと手元の書類にペン先を引っ掛け、小さな墨跡を作った。

「どんなプランなんですか？」

「プラン？ おまえ、明らかにさつきプランつて言つただろう。

「何が？」

「半月とかつて、旅行ですか？」

「そうだ」

「へえええ、誰と行くんですかあ？ 一人とかですかあ？ まさか

「 ブラ」

「クエイドー？」

「ぶらつと一人旅？」

小刻みに肩が震える。

思わずぎつと視線を上げると、クエイドはいやにこやかな微笑みで小首をかしげた。

「いいですねえ。まあ、独身時代はいろいろ楽しむもんスよねえ？」

「 そうだな！」

ロイズは乱暴に言い切り、書類に戻った。

まいい 旅行だ、旅行。

相手はチビ魔女だが……共に居られるならば不満は無い。
そう、不満は……

不満だらけだった。

web拍手お礼小話つめつめ（4）

「隊長？」眉間の皺、取れなくなりますよ
揶揄するようなクエイドの言葉。

ロイズは仕事用のファイルを棚へと戻しながら相手を睨みつけた。

「問題か？」

「田つき悪いんだからあんた、そういう顔してると雰囲気悪くなる
でしょ？」

「……すまん」

「まあ、なんか悩みでも？」

吐き出せばちよつとは軽くなるかもせんよ」「
はははと笑う部下をじっと見詰め、ロイズは嘆息した。

「何をしてもつましくはない」

「せうですか？」オレに言わせれば隊長は半際よくイロイロでき
てますよ」

事務仕事も完璧にこなしている。

身体能力も悪くない。何故こんな僻地に左遷
してきたのか判らない。

「ヘタレ認定つてなんだ」

「は？」

「何故オレがヘタレであいつがむりつづ？　いやいや、むりつづは
褒め言葉じゃない。

そんな称号は欲しくない。だからとこつてなんでオレがヘタレ？」

「……」

「オレはヘタレか？」

「イエイエ？　隊長は立派ですよー？」

「ほつときやよかつた。

クエイドは両手のひらを自身の前で振りながら激しく引きつった。

……真面目な人程なああ。

* * * * *

「……魔女殿」

クエイドは木の上で寝そべつている魔女の姿にうんざりとした。昼寝はいいが、できれば不用意なところに屈て欲しくない。

声をかければブランマージュがあふりと欠伸を漏らす。

「落ちますよ」

「うんざりと言えば。
「落ちないわよ」

とかえる。そうつスね でも猿だつて木から落ちますからや。それに、そんな中央広場の木の上に屈られたら迷惑だ。第一隊に見つかつたらどうするあんた。

やれやれと忠告すれば、ブランマージュはにんまりと笑つた。
……絶対に駄目な感じの笑いだつた。

「副隊長は真面目よねえ」

言つておくが真面目なつもりは無い。
どひらかといえは適当に生きている。サボる技術は一級品だ。
「つひの御嬢さんにならない?」

今何言つた?

「あたし結婚はしたいのよ」

「どんな罠だよ!」

あんたはオレを殺す気か?

ギャンツに殺されるかロイズに殺されるか判らん罠をはるな!

それに魔女と結婚なんて絶対にムリ。絶対にイヤ。絶対に有り得ない!

「ちえー、だつてあたしの周りつて変態ばっかなんだもの

言つとくがなあ、その変態を作つてまわつているのはおまえだ!――

* * * * *

「風邪ですねえ」

寝台で臥せつて いる魔女の姿に使い魔が苦笑する。

「もおお、ヤ……しんどいっ」

ブランマージュが枕を抱きしめて赤い顔をしているのを眺めて、使い魔はかいがいしくその額の汗をタオルで拭つた。

「あとで林檎をすつてあげますねえ」

「んー」

「あつたかくして寝なくちゃ駄目ですよお」

「怪我なら治せるのに」

病気に関しては魔女といえども時間がかかる。

赤い顔でと息を落とすブランマージュの世話をかいがいしく勤め上げながら、使い魔は実際に幸せそうにブランマージュの頬を撫でて立ち上がる。

「冷たいものを用意しますね」

「シユオン」

「はい」

「一緒にいてね?」

「大丈夫ですよ。ちゃんと ずっと一緒にいますよ」

子供のように不安定になる主の様子に使い魔は湯げるような笑みを浮かべた。

元気な主でいて欲しいけれど、たまには病気も悪くない。
使い魔は緩む口元を少しも隠さなかつた。

* * * * *

「どうした?」

月夜の晚だ。

木の上に腰をかけて座っている魔女の姿にロイズは夜警の途中で気づいた。

ぽんやりとしている魔女は、やけにゆっくつとした動きでロイズを見下ろした。

「あら、くま」

「……誰が熊だ」

「なんかねえ、ちょっと体がだるいんだわ」

言いながらふわりと浮かび上がる。

だがその体がへろりと落ちそうになるから、ロイズは慌てて自らの手を伸ばして魔女を抱きとめた。

「おまえ、熱があるんじゃないか?」

「んー?」

「魔女も病気になるのか」

呆れたように言いながら、抱えなおす。

腰の辺りから持ち上げ、自分の首に腕を回すよつこと言えぱくつたりとした魔女は言われたとおりにロイズの首に腕を回して熱い吐息を落とした。

「平氣か?」

「すこーし、しんどい」

ゆつくりとした足取りで魔女の森へと進路を取りながらロイズはブランマージュの腕の熱を、吐息を感じていた。

「人に移せば……治るつて言つぞ」

「んじや隊長殿にあげる」

ぎゅっとロイズの頭を抱えて抱きしめてくる魔女に嘆息する。

「おまえ、酔つ払いみたいだ」

実際に酒酔い状態になつた魔女を想像すると頭が痛い。やれやれと歩を進めるロイズの頬に平常より高い体温の魔女の手が触れ、ぐきつと音がするほどに顔を無理矢理横に向けさせられた。

何するつ。

と言おうとした唇に、ブランマージュの唇が触れた。

熱い……

「うつった?」

「……」

「駄目かー?」

へにやりと魔女が体重を預けてくる。

呆然と足を止め、ロイズはやがて息をついた。

「 なあ、ブラン…… オレだけにしておけよ?」

聞こえてないだらうなあ。

ロイズは腕の中のブランマージュを抱きなおし、その腕に力を込めた。

* * * * *

「 だるーい、しんどーい」

寝椅子に転がりぶつぶつ煩い魔女がいる。

うつぶせでクッショוןを抱き、時々「べくちん」と謎のくしゃみをする生き物だ。

エイルは冷たい眼差しでそれを眺めていたが、やがて棚に向かった。

「 ダーリン、お薬ちょーだい」

「 ……」

エイルは幾つかの重なった白い陶器を引き出し、着々と準備をすすめていく。

クスリを調合してくれるのだろうとブランマージュは瞳を細めたが、やがて振り返ったエイル・ベイザックは実際に嬉しそうに口元に笑みを刻んでいた。

「 鼻水と唾液」

「 ……」

「 研究材料にする」

ぐつと肩口を押さえ込まれ、綿状のものをすいすいと鼻へと差し込まれそうになる。

ブランマージュは声にならない悲鳴をあげながらじたばたと暴れた
が……

web拍手お礼小話つめつめ（5）

目の前には三人の使い魔がいます。

一人は蝙蝠のシュオン。得意なことは家事全般。
もう一人は一角獣。得意なことはセクハラ。けれどその能力は計り知れません。

もう一人は大鷹。得意なことは追跡、ストーキング。

「あなたが落とした使い魔はどれですか？」

泉から現れた女神の言葉に、ブランマージュはにっこりと微笑みました。

「いや、落としてないから！」

「まあ、謙虚な心が素晴らしい。この三体の使い魔を全て差し上げましょウフ！」

「落としてないから！……」

七人の小人たちが泣いていると、そこに魔道師が通りかかりました。

「なんだ？」

「ああ、魔道師様っ。魔女があやしい人から貰った林檎を食べて死んでしまったのですーー」

「毒林檎だつたに違いありませんーー」

小人たちの訴えに魔道師は棺で横たわる魔女へと視線を向けました。

永遠の眠りについていたのは黒紫の豊かな巻き毛のそれはそれは美

しい魔女でした。

「

魔道師は無言でスルーすることにしました。

「待てこらつ！」

永遠の眠りは終わつたようです。

「生きてるじゃないか」

「ここはキスするところでしょ！」「

「遺体に口付けるような趣味はない」

「おまえは絶対にブランだつたらヤツてる！ 断言できるわよ！」

「それがどうした」

……やるね。うん。やるね、キミ。

七人の小人たちが泣いていると、そこに警備隊隊長殿が通りました。
「どうした？ 何があつたんだ？」

「ああ、隊長殿。魔女があやしい人から貰つた林檎を食べて死んでしまつたのですー」

「きっと毒林檎に違ひありませんー」

小人達の訴えに、隊長は棺で横たわる魔女へと視線を向けました。

「ブラン！」

棺の中には猫耳猫尻尾のブランマージュが寝ています。

慌てる隊長殿は目を見開き、横たえられたブランマージュの肩を引き起こし、叫びました。

「捨い食いとかしているからだつ。食い意地張りすぎだろ？ 知らない人からモノを貰つて食つなんて、おまえはうちの猫か！」
「うるさいわ！」

「ブラン！」

「耳元で叫ばないでよつ。耳大きいんだからつ。人間より性能いい

のよつ「

耳を伏せたりやんと訴えてくる魔女を抱きしめ、隊長殿は大きく息をつきました。

「それに、これは白雪姫のパロティなんだから、棺の姫君はキスで起こすもんでしょうが」

呆れたよつに言つ魔女に、隊長殿は瞳を瞬いて提案してみました。

「じゃ、じゃあもう一度？」

「……却下」

* * *

「マスター、どうくんですかー」

猫耳猫尻尾のあかずきんがバスケットの中にパンとぶどう酒を入れて歩いてくると、「こやかな狼が現れました。

「レイリッシュの」と」

「ぼくとあそびましょー」

「やだ

「じゃ、じゃあ、ぼくも一緒に行つていいですかー？」

「好きにしなさいよ」

てくてくと歩いていくあかずきんの後を、狼はぶんぶん尻尾を振つて歩いて行きました。

「もおつ、じゃれつかないつ

「へへへ、マスター大好きですつ

「重いつたらつ

あかずきんの背中に張り付いてにまにましている狼を 冷ややかな顔した狩人が狙っています。

狼つ、気をつけろつつ！－

* * *

「さあ、かわいそつなシンデレラはいいね！」

猫耳魔女は舞踏会に行くことができないシンデレラの部屋を訪れました。

屋敷の屋根裏に追いやられたかわいそつなシンデレラは

「ヒギヤアウウウウウ」

愉しそうに魔獣の合戦に勤しんでいました。

屋根裏部屋はさながら悪魔召喚の儀式部屋のようのです。

「えつと……シンデレラ、今夜は舞踏会よー。このあたしがとつておきの魔法で

「行かない」

魔道師はきっぱり拒絕。

「舞踏会に」

「いかない」

「……舞踏会に出れば王子様と幸せに」

自分で言つてそりやないなーと魔女は思いましたが仕方がありません。魔道師は眇めた眼差しと口元に刻んだ笑みで魔女に近づくと、魔女の頬に手を掛けました。

「おまえでいい」

「それはどーでしょーかー、シンデレラはですねえ、王子さまと

」

耳がぺたりと倒れます。

「シンデレラは魔女と幸せになりましたためたしめでたし棒読みやめてーっつーつ。

* * *

「アンニーナ、ワイン届けに来たわよ?」

赤ずきんちゃんがバスケットを持ってアンニーナの自宅を訪れる

アンニーナはいました。

そのかわり、魔道師がふんぞり返ります。

「……」

赤ずきんはじつと魔道師を見つめて言いました。

「アン食べちゃった?」

「おまえ、まったく別の意味で言ひただらう~」

赤ずきん=ぶらん

狼さん=エイル

おばあちゃん=アン(なんか殺されそつ)

「アン！ ハイル食べちゃった？」

久方ぶりに訪れたブランマージュが尋ねた言葉に、アンーナは悶絶した。

もう条件反射と言つていい。腹を抱えて寝椅子にへばつつき、ひーひーと肩を上下させる。

「あいつってば幼女趣味に走ったみたいなのよー。」

更にトドメをされたアンーナは息が止まつたりになり、ばたばたと寝椅子の縁を叩いた。

「ひー、ひー……っ」

「ひー、」

「殺す気かあああつ。ああつ、もおつ、面白い！ あんた面白いわ

」

眦から涙まで出てきてしまった。

喉の奥から「ひーひーっ」とこう音がもれ出てしまう。

「どうからそうでたのか知らないけど、ははははははつ、いや、うんつ、素晴らしいわ、ひーっつ、さすがんたは悪い魔女ねつ」笑い声が時々混じり、まったく意味が判らない。

「なにそれ、褒めてるの？」

「褒めてるわよー？ もお、あたしも見習いたいわ。」

いやもホント。あれも莫迦よねー。あたしに乗り換えちゃえぱいこのに

「は？ 何が？」

「いやいやいや。井、わりと男のほうが純情なのよ。いやー、アレが純情？ うわっ、もう死ぬつ

苦しそうに囁えながら、アンーナはがしつとブランマージュを抱きしめた。

「また遊びに来てねー。」

「……なんかキモチワルイ」
「だつてあんた面白いんだもん」
アンニーナは胃が痙攣するんじゃないかといつぱぢひーひーいつの
を止められなかつた。

* * *

「結婚願望はあります！」
多少の酒が饒舌にさせると、ブランマージュは陽気に手をあげて
宣言した。

「結婚願望があつたのか？」
ロイズはちびちびと酒のグラスを舐める。
あまり強くはない。

「あるわよ！」

「どんな相手がいいんだ？」

さらりと言つたつもりだが声がちょっと上ずつてます。
「年上！ 年下は駄目よねえ。三十とか上はいいかも
「は？」

「無口で文句は言わないタイプ」

「……」

「それでもつてあたしより強くて、家事ができて」
ぽんぽんと列挙される言葉、最後にこれは大事とブランマージュは
指を突きつけた。

「年に一度ぐらいしか帰つてこない！」

「おまえ……本当は結婚願望ナイだろ？」

「あるつてば」

* * *

「あのね、噂で聞いたんだけど」

ブランマージュが真剣な調子で尋ねてくる。

「なんだ？」

「あんた、実は26だつて？」

「もうすぐで27だけどな」

せりふと言われ、ブランマージュは物凄い嫌な顔をした。

「三十過ぎじゃないの！？」

「……いや、おまえ本当にオレの年齢をなんだと黙っていたんだ？」

「三十五前後」

「そこまでふけてないからな！」

いやいやいや。

「だつてあんた隊長でしょ？ 腐つても」

「腐つてるつてなんだ！」

「そんな若くて隊長つて、普通ありえないわよ」

「着任した時は24だつた」

「若つ、あんたそんなどつたの！？」

「結局これは若さじやなくて家の問題だひつ。それに、うちの兄貴が王宮勤めだから

さすがに自分で能力とは言えない。

「ああ、七光り！」

「……身もフタもない言い方するな

「こんどぴっかり君つて呼んでいい？」

「呼ぶな！」

「ぴっかり熊」

「……」

「語田が悪いかあ

* * *

「はいはいはーい、ダーリンに質問が届いてますー！」

「なんだ、うるさい」

「ダーリンの職業はなんですか？　だつて
熊は隊長ですが、確かにエイルってば引きこもりにしか見えない
もんねー」

「でもダーリンって魔道師よね？　あれ、魔道師って職業？」

ただの引きこもり研究オタク？

と言った言葉が悪かったのか、ブランマージュは私室から追い出された。

「つてコトで、家人さんに質問！　エイルは何の仕事してるんです
か？」

がしりとつかまれて質問されたのはいつもの老家人。まだちゃんと
健在です。

「旦那様は魔道アイテムの開発作成に携わっておいでです。旦那様
の作成されるものは用途も素晴らしい出来も良いので高値で売れる
ようですよ。それに、あの……趣味にしていらっしゃる魔物の融合
なども好事家の方には喜ばれておいでとして、高値で売れておりま
す」

「つまり、趣味と実益を兼ねてるのね」

「最近では魔女殿のように耳や尾のつく魔道アイテムが高値で売れ
ています」

「は？」

「耳や尾の付くアイテムです」

「はあああ？」

猫耳・猫尻尾がつくアイテム絶賛発売中です。

つてか、エイルってわりと猫耳好きだよね……

水遊び

「何て格好してるんだ！」
警備隊の隊舎の横にある馬房。そこには馬の為に水が引かれていて、
丁度プールのように水が溜まっている。
あくまでも馬の為に、だ。

「あづーいんだもん」

子供達と水の中に入っているブランマージュの姿に、ロイズは身を
戦慄かせた。

「ねー？」

「いいじゃんねー？」

「ケチくせー」

子供達まで追従しているが、パンツ一枚の子供達。そして、申し訳
程度の布で胸元と腰の辺りを覆っているだけのブランマージュ。

「水着。アンーナがくれたの。可愛い？」

誰だそれ。

このときのロイズはまだ他の魔女との面識などもあわせていないか
つた。

「ばつ、オマエはっ」

にんまりと笑みを浮かべ、ブランマージュが水桶の縁に手を掛けて
ふわりと浮き上がる。

裸身に近い格好で中空に浮き、ついつい近寄られてロイズは身を引
いた。

「中年男には刺激が強すぎたかしら？」

「だれが中年だ おまえな、オレの年齢を」

幾つだと思っているんだといつ言葉は遮られた。

「ブランマージュー」

突然の大声に。

さつと視線が声の方へと向く、それは第一警備隊隊長であるギャンツのもので、ブランマージュは一気に青ざめた。

パニックを起こして浮かんでいた体が沈む。慌ててロイズがその体を抱くように支えると、ブランマージュをぬらしていた水気が、ロイズの隊服に浸み込む。

ブランマージュの体が小刻みに震えているのを感じた。

遠くで聞こえたギャンツの声が近づいてくる、咄嗟にロイズはブランマージュを自分の背と木の間に隠していた。

「ロック。第一隊隊長 先ほどブランの声がしたようななんだけれど、知らないかな」

すかずかと近づく足音で背中のブランマージュがいつそうしがみついて震える。

「いや、知らないが」

「そうか、すまなかつた。もし見かけたら知らせてくれ。いいね?」

温厚そうな第一隊隊長はそれでも多少の苛立ちを押さえ込むようにして微笑み、ついで子供達が馬用の水置き場に入っていることに苦笑する。

「おかしな遊びばかりしてはいけないよ。おまえ達もブランマージュを見かけたら教えておくれ。そしてブランマージュをあまり困らせてはいけないよ」

やんわりとつげて軽く手を払つて行くギャンツ それを見送り、ロイズはほつと息をついた。

「……もういいぞ?」

まだ背中で小さなふるえをみせるブランマージュに声をかける。

「こ……」

「ん?」

「腰、抜けた」

は?

ぎゅっと背中のシャツを握り締め、ブランマージュが必死にしがみつぐ。ぐるりと首をめぐらせれば、半泣きのブランマージュの姿にロイズは天を仰いだ。

「ブラン、へいきー？」

子供達が水桶のへりで首をかしげている。

苦笑を零し、ロイズは体制を変えて振り返り、ブランマージュの腕をひきあげて自分の腕の中に抱き上げた。

「ここには第一隊の人間もいるんだから、ヘタな遊びをするな

「だって、ギャンは外巡りの筈だったのだもの」

だから逆に隊舎敷地内で遊んでいたのか。

腰が抜けたというブランマージュは、動けないのかおとなしくロイズの腕の中におり、胸に寄りかかる。ロイズは子供達を一瞥すると、

「休ませてくる。オマエ達も程ほどじりよ

「んー」

「ブラン、今度は川で遊ぼうね？」

「ギャンンシはほぐがいつかやつつけてやるからやつ

子供達の言葉にブランマージュが薄く笑う。

「ギャンは悪くないわ

そういう言葉に、ロイズはぎしづと胸が痛んだ。

「ギャンをああしたのはあたしるもの

「

「……普通にしてくれば、ここにこね。普通に好きだつて言われ

れば

吐息交じりにブランマージュの言葉に、ロイズは瞳をすがめた。

何故か胸のどこかが痛む気がした。

調子が狂うのは殊勝な態度など見せない魔女が珍しくしおれているからだ。

生意氣でイタズラばかりの悪い魔女ブランマージュ

それから魔女は数ヶ月もの間ロイズの前から姿を消した。
魔女がその姿を見せなくなつてはじめて……ロイズ・ロックはその
時の胸の痛みの理由にほんの少し近づくのだ。

「師匠、師匠」

寝台の上から動じない漆黒の魔女に、エリイフィアは淡々と呼びかけた。

「うう、眠い、頭痛い、あうう」

「お酒の飲みすぎです。酒精を抜けばいい」

端的な弟子の言葉に、師匠であるところの魔女は唇を尖らせた。

「そんなのつまらなくてよ、エリイ」

「ではいつまでも頭痛と友人協定を結ぶのですね」

「まったくあなたときたら理想的な弟子ね」

「反面教師という言葉通りにあなたもとても素晴らしい師匠です」
エリイフィアは冷たく言い、レイリッシュの体からばさりとシーツを剥ぎ取った。吐き出された白い裸体は見事としかいいようがないプロポーションだ。まったくどんな魔法を組み立ててこれを維持しているのかとエリイフィアは思うのだが、生憎と師匠はその方面的魔法を教えてはくれない。

噂では人間の生血を日々飲んでいるとまで言われているが、それはないだろう。魔物の血清程度なら飲んでいるかもしれないが。

「エリイ、エリイ」

「なんでしょう」

「あなたにプレゼント」

弟子に冷たくあしらわれた美貌の魔女は美しい顔にそれはそれは綺麗な笑みを張り付かせ、両手でソレを捧げて見せた。

「グエ！」

両手でしつかりと抱かれた巨大なカエル。

カエルだ。

まだらの体のぬるりとした生き物。

エリイフィアは暗褐色の瞳を大きく見開き、「ぎり」と小さくつぶやくと持っていたシーツを放り出してばたばたと寝室を逃げ出した。

「ふふふう、そこでおつかない鬼娘を追い払ってね？ 可愛いあた
くしのナイト」

レイリッシュユはあふりと欠伸を一つかみ殺し、カエルを出入口の扉前へと放り出すとまたしても寝台にへばりついた。

途端、ばしゃりとその寝台に水がかけられる。

ばしゃりばしゃりと三度続けられ、自らの体もあきれるほどぬれねずみになるとレイリッシュユはひきつった笑みを浮かべた。

「エリイ！――！」

「あなたのナイトは本田の唐揚げですかりねー！」

どっちが師匠かわからない、エリイフィアとレイリッシュユのほんの少し昔の話。

* * *

「ブラン、ブラン、ブラン」

アンニーナはぐごごごとブランマージュの袖口を掴み引っ張った。

「弟が死ぬうつ」

「いや、うん、なんとこつか的確に死にそうな場所は避けてるみた
いよ」

「氣色悪いのにかじられてるつ」

「……船酔いがぶりかえしそう」

その光景は凄絶。

しかし何よりすゞこのは、ファルカスが反撃をしようとするのを容易く押さえ込み、靴底で踏みにじり、剣の切っ先でその皮膚の表層に文字でも刻む気安さで体をなぞり、それはそれは美しい微笑を称えて、

「気が触れるまではせぬ。死に絶えるまではせぬ　いつそ殺せと願つてみるがいい」

ものすゞく嬉しそうにエイル・ベイザッハ……

「なに、なんなのあの拷問吏みたいな生き物！」

「あれは悪魔類鬼畜田エイル属　超凶惡な悪魔です。すみませんなんかもお、びりしてあたしが謝つているんだか誰か教えてー。

「ぎやあ、すとっぷ、ストップ！　ファル痙攣してるとから」
「さつさと治せ。時間が足らぬ」

エイルは剣の血を払い、額につつすらと浮かんだ汗に張り付いた前髪をかきあげた。

悪魔類鬼畜田絶好調……

* * *

「はいどーぞ」

一枚のカードを手にブランマージュがにやにやとしている。
ロイズ・ロックはじつとそのカードを見つめた。

「これだつ

引き抜いたカードはジョーカー。

「ばーかーめえつ

笑い転げるブランマージュに、ロイズは唇をへの字に曲げた。

「あたしの勝ちー！」

「くそっ、また負けたつ

「やあん、またロイズのお菓子もひっぢやつた。あたしふとつかやうかもだわつ」

ぱしりとカードを場に捨てるロイズとは裏腹に、エイルは本に視線を落しその反対側でファルカスはナシツを口の中に放り込む。

「あんた達もやるーよーお

「やんねーよ

ファルカスは吐き捨て、小さな声でエイル・ベイザッハに言つた。

「なあ、あの男は氣づいてないのか？」

「何がだ？」

「あんなのイカサマじゃないか！ 魔女を相手にカードなんて丸見えみたいなもんだろつ」

誰が好き好んでそんなゲームをするだらつ。

まあ、賭けているのはたいていが食べ物や簡単な罰ゲームなのだが。「氣づいてないのはブランくらいだ

「は？」

「あの男はわかって付き合つておるのだ」

エイルは吐き捨てるど、つまらなそうにファルカスを睨みつけ、あまつさえげしりと蹴りまでくれた。

「混ざつて來い」

「……はい？」

「行け、カス

「……はい」

ぴろりるりーん。

エイル・ベイザッハは手下を手に入れた！

エイル・ベイザッハはプライドが邪魔して一緒に遊べない！
エイル・ベイザッハは矜持だけは無駄に高いのだ！！

「七夕って、もう終わったわよ」

「旧暦がある！ そもそもだな、七夕を祝うのは旧暦がいいんだ。晴れの確率がぐんと上がる」

ロイズの熱弁に、へえっと乾いた笑いを返す。

どうでもいいことに熱中するね、熊隊長。

「まあいいわ、短冊に願いを書けばいいのね」

「そう」

あたしはペンと短冊とを受け取り、じつと考えた。

まあ、考えるまでもなく願いは決まってる。

元の体に早く戻れますように！

よし、牽牛と織姫よ、願いをきき届けるが良いつ。

あたしは自分のペンを置き、隣のロイズの手元を覗き込んだ。

「……あんたは本当にいいやつよね」

ブランマージュが早く大人の体に戻りますよつ。

あたしがほろりと泣きたい気持ちになつてこむところ、ロイズ
ときたら視線をそらし、

「色々あるんだよ、色々と」

とわけのわからないことをいい、それからと短冊を籠こつむしていった。

いろいろつむ？

* * *

「面倒くさい」

むつ、人がせつかく仲間にいれてやるのとこのこと、エイルは相変わらずだった。

「たまには童心にかえって、純粋な心でもつてこいつイベントに参加してみなさいよ」

「こんなところに書いて願いがかなうのであれば世話をなかひつ

……いや、うん。

そりゃそうなんだけどね。

むーっと耳を伏せると、エイルは諦めた様子で息をついてペンを取り上げた。

ブランマージュが早く元のからだを取り戻せるよ。

「うわっ、ダーリンにしては意外なつ」

「意外か？」

「もつといへ、なんてこいつかドロドロじこじことを書いておつました！」

それに、あんたチビのほうが好きじゃありませんかー。

というあたしに、エイルは冷たい眼差しを向けながら呟いた。

「そりそろ色々我慢の限界だ」

「は？」

「いや？」

……いま、なんか背筋が寒くなつた感じなんだが……

* * *

さりげなく、さりげなーく。

「ほんと咳払いを一つ、これはそう、つまりアレだ。

いやらしい気持ちとかじやなくて、猫好きとして猫耳とか猫尻尾とかに触れたいといつ、まあよくある欲求のひとつだ。

なんといっても、フランマージュしたいが言つてこだじやないか。尻尾を触つてもいい、と。

逆撫では駄目だと言つてこたが、いやがるようなことをする訳じゃない。

普通にちよつと撫で回したい 撫で回したいっていう表現はなんだがいやらしくないか？ いや、だから自分は純粋にちよつと触りたいだけだ。

毛のある生き物は癒しなんだ。そう、癒し。

「えつと、フラン？」

枕代わりのクッションを抱いて寝台に寄りかかっているフランマージュはどこかうつむいて見上げてくれる。

「なによ」

「尻尾、さわつていいか？」

もともとの約束なのだから後ろめたく思つ必要などナ。なんだかおかしい気持ちもあるが

「絶対にイヤー！」

……猫化が進んでいる為に猫扱いされるのがものすくいやだなんて、まあロイズは知らないのだった。

ロイズ・ロック 果てしなく間の悪い男。

* * *

* 下ネタ注意。

「絶対にあんたを相手にするのはイヤ」

アンニーナは凶悪な顔で白髪の男をにらみつけた。

魔女の能力をそぐ為の白い縄をかけられるといつ屈辱の現状、更に凶悪な結界を張られた一室に閉じ込められたアンニーナたつたが、その矜持を総動員して相手を睨んでいた。

「我だとてイヤだ」

ケツと返される。

腕を組んで壁に背を預けた白髪の男は、冷ややかに転がる魔女を眺めた。

「何故におまえなど抱かねばならぬ」

「つて、までいら。どういう意味よ」

「そのままの意味だ」

「このアンニーナ様をなんだと思つてるのよ」

「色情狂」

「」

「おかしな病気をうつされてはたまらぬからな」

ふふんっと鼻で笑われた美貌の魔女は憤怒に相手を更に強く睨みつけた。レイリッシュの結界の中でなければ殺していくところだ。

「病氣なんてもつてないわよ、失礼ね！」

「使い古しに用などない。私は穢れない乙女を愛する一角獸だ」

「この、バカ馬！ ちょっとこっち来いっ。殴らせなさいっ」と、なんと失礼な。熟しきつたオンナを舐めるなつ。

体もテクニックも一級品だ！

「ミノムシに何ができる。この阿呆魔女」

きいつと顔を真っ赤にしたアンニーナだが、やがてにやりと笑みを浮かべてみせた。

「そうね、自信がないのよね。あんたきっとベタクソなのよ。それとも早X？ あら、もしかして短X？」

「貴様つ、我を何だと思つておるのだ！ 我は馬Xだつ！」
「馬Xと早Xじゃないつてことに因果関係はないわよね！」
むしろ馬Xだからこそ早Xなんぢやないのーつ。

「」の一人の口げんか、最低……

* * *

「平和だねえ」

ギャンツ・テイラーハ第一隊のクエイドにせんわりと微笑んだ。

「平和ですね」

「なんていうか、たまには」この事件のひとつもあつていいと思わな
いかい？」

などとギャンツらしからぬことを言つ始末だ。

あまりのことにつクエイドは瞳をぱちくりと瞬いてしまつた。
クエイドの手には黒猫が一匹。所長の愛猫の手を掴んで好き勝手に
動かしている最中だつた。

「ブランがあんまりおとなしすぎで……なんというか寂しいものだ
ね」

ただたんに「ブランマージュがいないことを愚痴つてゐるらしい。ク
エイドは眉をひそめて、

「魔女の森でも巡回してみては？」

「ひょつこつ出てくるかも」

「そうかな。 そうかもしれないね」

途端にギャンツは元気を取り戻して手を振つて出て行き、クエイド
は猫の手を無理やりふりながら「いつからしゃー」と見送つた。

「いい人なんだけどなあ。

いい人なのだが決して幸せになれないタイプ。

「ああ、うちの隊長も一緒に」

だがその隊長は現在旅行に行っている。

しかも……どうやら魔女殿と一緒に。もしかして幸せ絶好調かもしない。

「でもどうしてだか幸せにしている想像がつかないんだよな」

無駄に勘だけはいいクエイドだった

* * *

プランマージュの森を訪れたギャンツ・ティラーはいつもとは違う大胆な行動にすることにした。

道端でばつたりとプランに出会つ確立がかなり低い現状。ならば思い切つて自宅におしかけてみてはどうだろうか。

きつとプランマージュは相当怒るだろう。怒つてギャンツを激しく罵つてくれるかもしれないし、蹴飛ばしてくれるかもしれない。あの手で頬を張られたら天国にいつてしまうかもしれない。なんだかうつとりとしてきてしまつた。

ギャンツはどきどきしながらプランの自宅の玄関をたたいた。

出てきたのはつりあがつた細い眼鏡をかけた一人の女性で、その女性を見た時ギャンツ・ティラーは思わず叫んでしまつた。

「プラン! ? どうして突然年寄りになつ! ?」

ギャンツはげしりと踏みつけられ、拳銃乗馬用鞭でびしりと叩かれるハメに陥つた。

ある意味願いはかなつたかもしれないが……

「誰が年寄りだい!」

シリィフィアの激しい怒りを買つてしまつた。

「あ、あなたはどなたですか? ここはプランマージュの家じゃ」

「ブランなり留守だよ。私はあの子の歸匠 母親だ」

ふんつと鼻を鳴らしたエリイフィアの言葉に、ギャンツせぱつと顔を綻ばした。

「ブランのお母さん！ 私はギャンツ・テイラー、この町の警備隊第一隊所屬、現在は隊長として任務についています。年齢は28独身。両親はすでに他界している為いません。同居もできます」

「……何の話だい

「娘さんをぼくに下さこー！」

エリイフィアはじりじりと無遠慮にギャンツを眺めていたが、やがてぽつりと言った。

「肩がはって困るんだけどねえ」

「もませてもらいます、お義母さま！」

もしかしてブラン、ピンチじやありませんか？

隊長と魔女

嵐の前の静けさ　とはよく言ったものだ。

ロイズ・ロックは警備隊隊舎、第一隊室の自分机に向かいながら、
がりがりと乱暴にペンを走らせた。

半年近くの間姿を消した魔女。

出てきた途端、彼の周りは騒がしさを増した。

「隊長！

リーバルテ一帯の獸柵が桃色です！」

「馬の模様が牛柄に！」

「子供達がいません！」

「ほつとけ、子供と魔女は結託している
くだらん、実にくだらん。

しかも理由を考えるまでもなく、あの魔女、ブランマージュの仕業
であると知れる。

あれだけ静かであった町。魔女を案じていた人々も右往左往の大騒
ぎだ。

がりがりと書類を書く。

もう幾つ下らない報告書を書かされているのか　あああ、家に帰
つて猫と一緒に田向でまどろみたい。

「たーいーちよー

はううと、自らの上から赤味の強い金髪が落ちた。
どくどくと心臓が剥ねる。

ぱきりと羽ペンが折れた。

「ブランマージュー」

「本日もお勤め」苦労様ね、熊男

ふかりと浮かび、頭を下にしたような状態でブランマージュがひらひらと手を振る。

「おまえっ、何をしまくつてるんだ！」

「だあつて、みんな寂しかったみたいだからあ。ただいまーの意味を込めて色々してみました」

ふふんっと、魔女が笑う。

「とつとと色々なペイントを消して来いっ。子供達はどうした！」

仕事中ということもあり、自然と口調が厳しくなってしまつ。

「子供達はあたしの森で遊んでるわよ？

ちゃんと結界はつてあるから、おかしなヤツとか入らないし、危険な生き物もいないから十分楽しめるはずよ」

悪い魔女を自認するくせして、どこか中途半端なブランマージュ。ひくひくとこめかみが震えたが、ロイズはどつと肩から力を抜いた。

「つたぐ、この莫迦娘」

「ねえ、ロイズ」

ブランマージュはふわりと体をめぐらせ、小首をかしげた。

「ねえ、お願ひがあるの」

大きな金の瞳がロイズの視線に絡まる。

なんだか苦いものを感じながら、ロイズは前髪をかきあげた。

「でも、ね？」

「こんな感じじゃ……外に、来てくれる？」

魔女は小首をかしげてロイズを誘い、部屋のト拉斯からそのままロイズを引き出す。

ついていく必要などない」というのに、苦いものを噛むようにして足は外に向かう。

魔女は軽く体を浮かせたまま、すっと流れるように外庭へとおいつまるで畠に椅子があるかのように足を組んで座る。

「ロイズ」

口元に笑みを刻み、名を、呼ばれる。

ロイズはぎしづと奥歯をかみ締めた。

両手を差し出してくる魔女。

近づく必要などないと判っている。

その後どんなことがあるのかも、一度も二度も同じ手にかかるひつていられるものか！

それでも、ロイズはその誘惑に 抗えない。
くそっ！

呪わしい言葉を口腔で呴き、ロイズは一步を踏み出した。

踏みしめた大地が途端に不確かなものに変わる。

緩い布地を踏む感触、それと同時にロイズは嬉しそうな魔女の腕を力任せに引っつかんだ。

「さやあつ」

魔女が悲鳴をあげる。

ロイズはそれを腕の中に抱き込み、素直に穴に落ちた。

大人が一人らしくに収まるほどの大

落とし穴。

鈍い痛みが背中に当たる。
腕の中に、硬直する魔女。

「もおつ、この熊男！」

一人で落ちなさいよつ

せつかくロイズを落とし穴に落としてやるつと企んでいたというの
に、まさか自分まで巻き込まれるとは思にもしなかつた魔女が悪態
をつく。

華奢な体を腕の中に抱きこんだまま、身じろぎ一つしない男に
魔女はやがてその勢いを失つた。

「やだ、ねえ？ ロイズ？」

「……」

「打ち所が悪かつた？ 一応シールドは張つてあつたはずなのよ？
ねえつ、ロイズ？ なんとかいなさい、熊男！」

必死な声をあげ、ロイズの顔を覗き込んでくる魔女に、ロイズは
抗えない。

相手の骨すら折れるのではといつ力を込めて抱きしめ、その唇に唇
で触れた。

職務中だとか、問題だとか、そんなことがちらりと過ぎる。

甘い。

くそつ、くそつ、くそつ。

どうしてよりによつてこのオンナなんだ！

悪態をつきながら、それでも判つていてる。

理屈も理由も必要がないことを。

もう、どうしようもない。

「ぶらーん」

「ぶじー？」

突然聞こえた子供達の声に、ロイズは慌てて魔女を離した。

ブランマージュは一瞬呆気にとられたように瞳を瞬いたが、唇を噛むようにしてロイズの肩を一回押し、その反動を利用して地面へと舞い戻る。

「おまえ達！ 水をかけてやるがいいつ

「そこまでするのー？」

「ちよつと酷くない？」

穴の中を子供達が覗き込む。

穴の壁に手を掛けて体勢を整えようとするロイズを見下ろし、ブランマージュは真っ赤な顔をして子供達に命じた。

「いいんですね！」

子供だ。

ロイズの喉の奥が「クツ」と音をさせた。

それに対してブランマージュは更に激怒したのか、本当にロイズの頭から水がかけられる。

バケツをひっくり返したようにぼしゃりと激しくやられ、子供達がキャーと歓声をあげた。

穴の上から、一対の眼差しが強い光を放つてロイズを睨む。

ロイズは肩を揺らして笑うのを堪えた。

あの眼差しに、囚われているのだから仕方ない。

ふらふらと尻尾が揺れている。

チビ魔女ブランのスカートの下、すりつと伸びた白い尻尾。耳同様、どうやら勝手に動いているようだ。

それをロイズ・ロックは眺めながら思索している風だったが、おもむろにひょいとつかんだ。

「みやあああ」

最近突飛な言動の中に何故か一ヤーが混じっているブラン。

「あ、痛かったか？」

「痛いとかじやなくて！　なに？　いつたい何？」

「いや、田の前をふらふらされたら普通つかむだろ？」「

「掴まないわよ！　ってか離せっ」

「なあ？　やつぱりれつてびつてんの？」

「引っ張るな！」

「リボンつけたらかわいいんじゃないかな？」

「はーなーせえええ」

* * *

「お風呂はこりたーー」

「このせじまりはそんな台詞だった。

もちろん猫バージョンの時は毎日のよに風呂に強制的に入れられていくる。だがやつぱりヒドガタバージョンでゆつたりと入浴したい乙女としてつ。

エイルはなぜかやん騒ぐあたしがつひとつにののか、わざと呼び鈴で家人を呼ぶと、あたしを「風呂に放り込んでおけ」と命じた。

まあ、言い方は悪いけどあなたつていつもなんだかんだってやらせてくれるから好きよー。

なんて軽口を叩いて案内されたのは、一階の部屋だった。

「……もしもーし？」

数名の人間がせつせとバスタブに水を張り、なんだか判らない魔道アイテムで湯に変換させていく。だが一番気になるのは、この浴室の隣 あたしが案内された部屋だ。

「なんでしょうか、魔女殿」

「……なんていうか、随分可愛らしい部屋ね？」

なにこれ、エイルの趣味？

待たされている間、お茶が出されたりなんかしてそれはいいのだけれど、寝椅子とか可愛らしい一人掛けの安楽椅子とか、床のラグとか……

「……」

「……」

なんでエイルの家の中にあたしの部屋があるのか、だれか説明してくれ。

をい？

意味不明で怖いんだけど、をいい？

* * *

白いオウムはうんざつとしていた。

「やあ、おはよー」

「……」

さわやかな笑顔で声をかけてくるのは、ギャンツ・ティラー 最近何かとブランドマージュの小さな家を訪れて掃除や壊れた椅子の修理などをしている男である。

「こんちば」

「……」「……

ギャンツは上機嫌でオウムに話しかけてくる。

「ブランマーージュ、愛してゐるよ」

「……

「やつぱつこれは難しいかな。でも挨拶へらこま言ふんじやないかな。おはより、ブラン」

「……

「お・は・よ・り、ほら、書ひていらさん

「……おはより」

オウムはうんぞつとしながら応えた、すると、ギャンツは機嫌をよくしてうさうさつとうなずいた。

「おはより、ブラン　ほら、書ひていらさんよ」

「おはより、ブラン」

「かしここや。じゃあ次は、ギャンツ素敵だ」

「……

「わやんと覚えて毎日、ブランに書ひてくれよ」

オレはチビの使い魔じやねえし、書葉へりい喋れるんだよつ。

超絶うざつ。

ギャンツ・ティラー……おかしなところで敵を作る。

* * *

「あの、アン様」

「うつさいつ」

黒髪の女が膝をついて必死に主を呼ぶのだが、その主ときたら苛々とした様子を隠すことなく、手の中のカードをチョックした。

手札に同じ数字はない。しかし五枚中四枚のマークは同じだった。

一枚を引き抜き、ペット用のコインを五枚追加する。

「一枚トレーデ」

「ほう、強気だな」

「おりても良いわよ?」

「私は一枚チョンジ。更に五枚」

勝負に乗る白髪の男にニヤリと笑い、アンニーナは吐き出されたカードをぱしりと翻した。

「ロイヤルストレートフラッシュ、おまえは見事にバラバラのようだが?」

「いーかー やーまー よおおおおつ」

「アン様つ、アンニーナ様つ、帰りましょうつ」

「うるさい! 」この馬鹿に勝ち逃げされてたまるものですかつ。今度は麻雀! 麻雀よつ。満願縛りつ、割れ目ありつ、安田あがつたら殴るつ

「メンツが足らぬだらつ」

「シティつ、王宮官吏の一人でも引っ掛けといでつ」

「帰りましょうよーつ」

……ファンタジーで麻雀は止めよつよ麻雀は。

* じめん、たまさ。実は麻雀はあまり判らないです。

「又に別れた枝だつた。

そう、それは無造作に置かれた一本の素晴らしい櫻の木だつた。

キバタンの瞳がきらきらと輝き、恍惚に身を震わせる。

「すげえ、すげえぜ。これはなんて素晴らしい止まり木！」

にぎりと足で握り締める。こう、なんとも足にぴたりと吸い付くようなフィット感。滑らかな木肌。もう片方の足も乗せてみる。

うむ！

これほど素晴らしい止まり木はついぞない。

キバタンのルウは感動にむせび泣きそつになってしまった。この木に身を預け、とつておきの虫を食おう。きっと至高の極みを得られるに違いない。

鼻歌を歌いながら飛び立ち、森に虫を探しに行くことにした。ああ、人生は素晴らしい。

丁度そこに帰宅したのはブランマージュ 10歳。

エリィファイアの娘として魔女見習いをしている。琥珀色の瞳と赤みの強い金髪の少女だつた。赤いフードをぱさりとおろし、外からの寒さでかじかむ手にふーっと息を吹きかける。

「エリューシュ、火をつけて」

外から一緒に戻つた巨大な灰色狼に頼む。火の魔法は制御が利かない為に禁止されているのだ。

体についた雪虫をばばばと体を震わせて落としたエリューシュは「ふんっ」と横を向いた。

「しらん」

「もおつ、いいじゃない。ケチ」

「自らできることは自らでこなせ。おまえには一つの手がある」

灰色狼はその澄み渡るような瞳で暖炉を示した。

「判つたわよ」

ブランマージュは唇を尖らせ、暖炉の置き火を探る為にふとテーブルの上に置かれている棒に手を伸ばした。

火かき棒の代わりにそれでもつて炭と灰とをかき回し、灰の中に隠れている置き火を引き寄せてフイゴでよいせと酸素をおくる。

まだまだへたくそなものだから、周りの灰を飛ばしてしまい酷い有様になってしまったが、それでもせつせと火を熾そうと試みる。やがてそれをじつと見つめていた狼は、あからさまに欠伸をひとつ吐き出すと、ブランマージュの持つ棒の先端に自らの魔力で火をともした。

「そんなでは体が凍える」

冷たい口調だが、ブランマージュは肩をすくめて木の棒を炭の中に放り込むと自分よりもずっと大きな狼の首に抱きついた。

「エリュー・シユはあつたかいなあ

暖炉の火が赤々と点るまでエリュー・シユで暖を取ることに決めたブランマージュだが、その時になつて窓から飛来した鳥に顔をしかめた。

「窓閉めて」

「つて、おまえらナーニ? え、おまえら……おまつ、その燃えてる木は何だよ! なーにーしてくれてんだよおおお」

「いやあー、何虫飛ばしてゐのつ。このバカ鳥つつ」

キバタンのルウの悲哀を理解してくれるものは誰一人としていな

かつた。

結夢（前書き）

* これは本編執筆中にかかれたものの為、まだ魔女っ子プランです。しかもあまりにも阿呆すぎてお蔵いりしてました。笑って流して下さいませ。

お酒がらみの一本です。

「旦那様つ」

珍しく慌しい足音と共に応えすら待たずに重厚な扉が開かれる。

旦那様と呼ばれたエイル・ベイザッハは灰黒の眼差しに憤りを滲ませて睨みつけたが、相手の慌てぶりのほうが大きかった。

「魔女様が」

「……ブラン?」

「本当に申し訳ありません」

蒼白な家人はがばりと深く頭を下げた。

「酒か……」

「ダーリンも飲むう？ 美味しいよー」

居間に飾られている酒に手を出したブランマージュがヘラヘラと笑つている。

「黙れ酔っ払い」

「よつてないよー？」

小首をかしげて酒瓶を抱きしめている様はあまりにも情けない。

「だつてあたしあお酒つよーいもん」

「」

「瓶の半分はへーきだもーん」

それは強いのだろうか？ 酒を滅多に口にしないエイルには理解の範疇外だ。

「そもそも今のおまえは子供とかわらぬだろつに。酒の浸透率も違う

立派な酩酊状態だな

「ダーリンものー」

エイルは冷ややかに呼氣を落とし、手を伸ばして酒臭い生き物の手から酒瓶を引き抜き背後の家人へと手渡すと、そのままブランマ

ージュの体を抱き上げた。

「お部屋の準備は整つております」

「そんなことより、これにもう飲ますな。体に悪い」

基本的には猫なのだ。

猫の体をベースとして作られた仮初の体。

抱き上げれば温かく、柔らかく、傷つけられれば血すら流す。けれどこれは偽りのイキモノ。

「酒臭い……」

半眼を伏せて眩き、自室へと向けて歩む。

ふと自分を見上げてぐる隈差しどかちあつた。

あらきらと瞳を煌かせ、口元は嬉しそうに輝んでる。

この顔は良く知つてこる。

何か企んでいる時の顔だ。

「ダーアリン」

「なんだ」

「いつただつあまーす」

抱えなおして私室の扉を開く。

イタズラをする気満々のブランマージュにさやつしながら扉をあければ、突然がぶりと鼻がかじられた。

「によ？」

「……」

「おこしくないよー？」

「」

「おこしゃーだとおもつたのになー？」

鼻をかじられた。

鼻をひくりと口元が引きつる。

しかも思い切り歯をたてて。

「ほのつ、愚か者！」

「ちーでたー」

いやせせせせせ、と笑こ出す莫迦猫を寝台に放り出す。

血が出たと言つて喜ぶブランマージュを睨みつけ、エイルは冷ややかにブランマージュの横に手を掛けると口元に笑みを刻んだ。

「治せ」

「んん……」

ブランマージュの眉間に皺が寄り、顔をあげて自らが傷つけた鼻頭をペリリと舐める。

二・三度同じ所作を繰り返されれば痛みがひく。痛みはひくが、自分の体の中のどこか別の場所がざわつと騒がれ、血の流れが速度をかえていく。

せじりと寝台が音をさせ、酒の香りが鼻腔をくすぐる。

そのまま、ブランマージュの薄く開いた唇に自分の唇を触れ合せた。

強く押し当てるわけではなく、ただ唇の表面が触れるか触れぬのかのぎりぎりの距離で。

「噛むな
舐めるんだ」

差し入れた舌先におずおずとブランマージュの舌がふれる。
それをからめとるみづこへりこねばねば、

「咲一・」

にやーっと奇妙な声をあげてブランマージュはまてりと寝台に倒れこんだ。

「おこしくないー」

自分の中の熱が急激に引いていく。

エイルは自嘲するよつと口元に笑みを浮かべ、前髪をかきあげた。

ブランマージュはさきと先ほど飲んでいた珈琲の味がしたのだろう

う。

「私には甘すぎだ」

自分の舌先には甘い吐息と魔女の息吹、そして蜜の味。

* * *

失敗したわ。

あたしはエイルを前に反省した。
猛省と言つてもいい。

ほんのちょっとしたイタズラだ。

ヤツの口にするもの全てに酒精を混ぜただけ。
直接体内に送り込んでもいいけれど、まあ、一応ね 絶対量つて
いつのがあると思うのよ。ばつたり逝かれでもしたら田覚めが悪い。

「ほんのり微笑を浮かべるエイル・ベイザッハ 気持ち悪い。

「ブラン、おいで」

いやいやいや。君のデフォならこは、来いでしょ?
なに、おいでって。

「いや、えっと……あの、スマセン

手をつかまないで。

瞳を細めて口元に笑みを刻みつけ、あたしを抱き上げる。

ああああ、チビ魔女は簡単に持ち運べるコンパクトサイズ。やめて、
なぜに膝に乗せる?

「ブランマージュ」

甘い吐息。

その吐息には酒気が混じる。

酔っ払いだ。まさに酔っ払い。ひいつ。

片手で抱きこまれ、もう片方の手があたしの歯をなぞる。

冷たい手がゆっくりと優しく。

「悪い、悪かったです」

開放を要求する！

「ブラン……」

指先が唇を割り、歯をなぞる。

うひいっとあたしの背筋に悪寒が走り、あたしの尻尾はいつもの倍に膨れ上がる。

「……見せて、じりじり」

「え、なに？」

囁かれた言葉が理解できなくて問い合わせ返す。エイルが口の端を歪めて笑い、すっと顔があたしの耳元に近づき、もつ一度囁いた。

「おまえの全てを知りたい」

うわあ、食われる！

じたばたと暴れるあたしの耳をぱくぱく咥える。それ猫耳、皮膜薄いからつ、やーめーてえ。

なんというか、駄目だ。これはエイルじゃない。

ちよつ、本当に勘弁。

ごめんなさい！

あたしが悪かつたってばー！

クリスマス・ヴァカンス（前書き）

冬だけは海だつたりする。

クリスマス・ヴァカンス

「うーみいいいいっ」

青い空、白い砂浜、さざめく波！

こちらこちら、視界の隅にある白骨は無視しなさい、無視。今日はヴァカンスですのこどよー…

え？ クリスマス？

冬だつて？ そんなことは関係ありませんよ。

だつて口口は万年常夏。

視界の端にいろいろいやんな落し物とかあつたり、大悪魔が砂浜に寝椅子を並べて優雅に日干してしたりするのは華麗にスルーの方針で。

「オレ、魔女の神経が時々信じられない……なんで始原の森だよ」「だつて誰もいないもん」

あたしは腰に手を当ててにんまりと笑つた。

「島全体がプライベートビーチ。遊びたい放題ですっ」

それでもって常夏！ 魔力に満ちたこの島は海遊びに最適な適温だ。冬だとクリスマスだと関係ナシ。

「ねーっ」

ぱんっと小気味良い音をさせて両手のひらを打ち合せたあたしともう一人。

顔を合わせてうなずくのはアンニーナ。今日のアンは超ビキニ

「あらあん、他に人がいんだから全裸でもいけるわよ」とうアンだったが、先程ロイズの強い説得により水着を着ることを承諾。アンの使い魔という鷹も泣きながら止めていた。

アンの使い魔はどうやら良識があるらしい。

ま、全裸よりはマシという格好なのでロイズは極力視線を向けないようしているのだが逆にエイルはじっくりとそれを眺めた挙句、ふつと鼻で笑つたものだから危うく怪獣大戦争に発展しそうになつた。

「そう、エイルもいます。

わざわざ大魔羅が日陰を作る為砂地にどすつと植えた木に寄りかかつて本を読んでいる意味はまったく理解できないが。

海だよ、海！ ヴァカンスしにきてるといつのにもかかわらず、何故木陰で本を読んでいるのか。この不届きものめつ。

「遊ばないなら来なければいいんだ。ぼくが人化できないじゃないか？」

と、あたしの頭にはりついてる蝙蝠が苦情を言つが、まあ、もつとも。

相変わらず蝙蝠はエイルの姿だつた。

少なくともあと半月はみつちりその姿で反省しろ。

そしてうつかりエイルの前で人化けして力いっぱい雷撃をくらうがいい。

「ふふふ、あたしが護つてあげるから変化してみればあ？ ぴっちぴちのブーメラン水着でお願い」

アンが嬉しそうに と、いうか好色そつに言つ。

「本当に護つてくれますか？」

嬉々として蝙蝠が言つたが、おまえ明らかに危ないだろ。いや、いくらでも報復されていいけどね。

「とーぜんよ！」

自信満々でうなずくアンニーナに、ぽんつと蝙蝠がエイルの姿で

ブーメラン水着。

ぶはつ。

ひいにいつ、見てはいけないものが田の前につ。

卒倒するあたしを、ひょいとロイズが抱き上げた。

「ブラン、ここは危険だ。いくぞつ」

そう、今あたしは実はちびブランだった。

だってエイルの前でオトナブランは危ないでしょ？ それにチビでいることにも慣れてきたし、チビのほうが色々と便利なのよ。

人間つて子供に甘いのよね！

特に熊は。

「マスターっ」

わーんつと追いかけてこよつとするシュオンに、あたしはべつと舌を出した。

よるなつ、来るなつ。

なんかこの猥褻罪めつ。ロイズみたいに普通のだぼつとした水着にしどけつ。

「やあん、やつぱりイイわ。魔導師」

「ぼくシュオンですうつ。アンニーナ様、はーなーしいてえええつ」

襲われてる、ボケ。

背を向けてその場を離れたあたしとロイズだが、元の地点はあつという間に戦場とかした。

エイル・ベイザッハの怒りを当然のように買つたのだが、アンニアはけろりと強化結界の中でエイル姿のシュオンを襲つてゐる。

「見るな！ 教育上よろしくない！」

ロイズは憤慨して岩場の辺り 被害が来ないよう避難し、そのくぼ地に溜まった海水の中にあたしの足をおろした。ぴしゃりと冷たい水がはねる。

「まずは体操だ」

「……いや、いいって。平氣」

「駄目だ。ちやんとしないと、心臓に悪いし足がつったりするんだからな」

水に入るときは足から順番に水をかけろ！

おまえ……教師か。

はるか後方では謎の光が明滅したりしているのだが、ロイズは変わらずマイペースに体操などしている。あたしはそれを無視し、さつさと岩場に溜まった海水の中、波に取り残された小魚などを追い回してみた。

「さかなーっ」

「魚好きなのか？」

「すごいスキーッ。生で食べるの美味しいーっ」

「は？」

「うつ、まずい。

何を言つているかあたしつ。

あたしは慌ててふるふると首を振り、引きつった笑いを浮かべてみせた「冗談にきまつてるでしょ。生で食べるなんて、猫じゃあるまいし」

あたしは人間ですよーっ。

魔女ですっ。

猫ではあつませんつてば。

なんか最近疑われているような気がしないでもないけど、あたしは
猫じゃありませんよ！

早く分離して魔女と猫に別れたい！

でも実際問題そんなに簡単なことではないようで、分離に失敗する
訳にもいかずには慎重に慎重をきたしているあたしは現在も夜はロイ
ズの自宅で相変わらずの白猫プランをせにゃならんわけだ。

酷すぎる。

そしてせつな過ぎる。あああ、あたしつて実はいいやつじゃない
！？

ロイズは苦笑し、くしゃりとあたしの頭を撫でた。

「少し泳ぐか？ せつかくの海だし」

「いや、泳ぐのはいいや。海ってなにがいるか見えないから、
ちょっと怖い。足元見えないし」

当然魔力を使えばいい話だけね。

でもそういうのは面倒くさいからしない。

「じゃあ、何か昼飯用に貝とか探してやるよ。おまえは危ないから
ここにいろよ？」

言つや、ロイズは豪快に海に挑んでしまった。

潜れたか……本当に身体能力だけは高いな。

あたしは肩をすくめ、岩場に囲まれたほんの少しだけ海水が深い場
所に足を入れて一回とふんっと胸元まで水に入った。

「ううう、猫に水つて実は駄目かもー」

尻尾が嫌がつてる。

耳は完全に伏せた 当人としてはもっと水遊びしたいのだが、
どうやら体は拒絕しているようだ。

あたしは元氣の無い尻尾を掴み、ざわーっとじぼつた。

だばだばつと水氣が落ちて、戦場に腰を預ける。

ふるふるのりと身を震わせ、一気に水氣を飛ばして息をつくと、ふいに、肩に重みがのしかかった。

背後からぎゅっと抱かれる感触は馴染みのものだ。

あたしは苦笑して腰に回ったその腕を叩いた。

「怪我しなかつた？　ま、アンが護つてやるつて言つてたから心配はしなかつたけどね」

いつの間にか魔導師VS魔女の戦いは終焉を迎えたらしい。アンの声が遠くでしているが、戦闘音はしていない。

ぎゅっと更に強く抱きしめられ、あたしは眉を潜めて顔を後ろへと向けた。

素肌にパーカーを引っ掛けた姿の使い魔が「マスター」と囁く。いつもどこか高い声ではなくて低くて奇妙な色を称えた呼びかけに、あたしは更に眉を潜めて小首をかしげた。

ちゅつ、とその唇が耳の付け根に、瞼に、頬に触れてくる。

「シュオン？」

どうかした？

いや、こいつのシュオンもキスもいつものことなんだけれど、なんだかいつもと違つて屈心地が悪い。

腰を抱く手とは逆の手　確かめるよつて歯の端を親指の腹でなぞられ、あたしは引きつった。

「ダーリン？」

おそるおそる問い合わせる。だがそれは確定だった。

だって魔力がシュオンじゃない！

言葉にした途端、あたしの尻尾がぶわりと毛を逆立てた。

ぎやあ気持ち悪い。

おまつ、時々本気で訳判らないことするの止めてっ。

人間崩壊してんじやないの？ 脳みそいつちやてんじやないの！？

「気づくのが遅い」

くつと笑い、唇を引き結んで笑うと更にあたしを抱く腕に力を込めた。

「愚か者」

「離れる、この変態幼女趣味」

エイルがそのまま口付けしようとしたところで、エイルの頭上から謎の貝類が降り注いだ。

「幼女趣味は犯罪だからな！」

海人口イズ・ロツク……その貝、へんなカタチしますよ。巻貝からなんかによろによろとした触手出でますけど、それ本気で食料として持ってきたのかおまえ。

なんか焼いたら食えるとかそういう問題じゃないっぽいんだが。

「貴様は 判つていて邪魔しているのではあるまいな」

「判つているに決まってるだろう！」

怒鳴るロイズに、エイルは冷ややかに口元に笑みを刻みつけた。

あああ、ここでも怪獣大戦争だよ。

あたしはそおっとその場を離れた。

砂浜に戻ればアンーナが嬉々としてシュオンを襲っている。馬鹿だな、シュオン、蝙蝠に戻ればいいのに。襲っているといつても明らかにからかつて遊んでいる様子なので、あたしは肩をすくめて

問いかけた。

「戦闘はエイルの根気負け?」

「あら、あいつってばすぐに辞めたわよ 別に痛くもかゆくもないことに気づいたってことでしょう？」

「そうかあ？」

自分と同じ姿のシュオンがあたしにはりついてキスしたりしていると烈火の「！」とぐ怒るが、アレは。精神衛生上の問題だと思つんだが、アンと自分の姿がいやついても平気つてことか？自分が襲うのと襲われるのとは違うってことだらうか……相変わらず判らんやツ。

開放されたシュオンがあたしにぎゅっとすがりつぶ。

「マスター！ アンニーナ様が虐めますっ」

「はいはい、とつあえずあんたその砂に寝ろ」

「はい？」

「砂蒸しつ

あたしは、ふふふふと笑い、シュオンを蹴倒しそのまま砂をかけはじめた。

アンニーナがあきれつつ加わる。

すごい、なんかきちんとヴァカンスっぽい。

浜辺の遊び満喫中！

「あの二人は？」

「さあー？ 仲良く喧嘩してた」

「本当に仲良しねえ」

アンニーナがくくくくと喉を鳴らし、せつせとシュオンに砂をかけていく。あたしのイメージとしては丸くこんもりと砂を載せ、最後には「シュオンここに眠る」と飾り文字をいれてやりたいのだが、しかしアンニーナのやりたいことは違うのだった。

「モモー、何してんの、何してんの！」

ショオンの体の上に乗せられた砂の形は、そのまま人間の形。

「あらあん、やつぱり砂を固めた裸像よおん。大事な部分はやつぱり大きいほうがいい？ 意外にちつさかつたりしたら笑えるんだけど」

いやあああ、なんぞう下品なあんたつてー

「ううう、見れないけどす」「いやな感じです」

見なくてよろしいつ。

ショオンが切ない顔でこちらを見つめてくるが、あたしは頭を抱えるくらいしかできない。

「そんなんに見たいのならば見せてやる」

だから突然割つて入つたエイルの声に、心臓が破裂するかと思つた。
「きやー、魔導師男前！ そつよね、男はすつぱりさつぱりぬいじ
やいなさいよつ」

「辞めわつ。辞めなわつよあんた達つ」

つて、

「ダーリンつ、ロイズはどうしたの！」

「沈めた」とこつのは嘘だ。落しさしだがな

ふんつと鼻を鳴らし、エイルは無造作にアンニーナ作 砂の藝術

?をどすりと踏みつけた。それは見事な股間部分を。

「ふぎやー」と悲鳴をあげてショオンが蝙蝠へと変化する。

ぴくぴくと短く痙攣する様がものすごく不憫を誘つ……平氣か？
もつ色々無理なのか？

蝙蝠はふらあつと二・三度その羽をはためかせたが、やがてぱた

りと砂地に落ちた。

おまえの死は無駄に つてか無駄いがいのなにものでもないか。

「あんたそのへんにアレ放置してきたの？」レーベンだと思つてゐるのよ、馬鹿か！」

あたしはほとほと呆れてとんつと砂地を蹴りつしたが、エイルの手がすばやくあたしの腰を掴んだ。

「ダーリンっ！」

怒るよつ。

「使い魔共もいる。危険などあらうはずがない
確信犯めつ。

確かにシュオンは役にたたないだろうが、他の連中なりばやすやすと人間を危険に晒したりはしないだろう。それでも信用などできなくてそのまま飛ぼうとすれば、アンが苦笑した。

「魔導師、貸し一つ」

「それを言つのであればブランにであるよ」

「あら、あんたによ？ ま、クリスマスプレゼント？」

お返しは三倍返しくらいでいいわよおん。

アンニーナは口唇を歪めて空間を転移した。

はつと氣付けば腰抱き込まれたままのあたしと、突つ立つているエイル・ベイザッハ。足元にはまったく頼りにならない瀕死の蝙蝠。だらだらといやんな汗が流れるのを感じる拳肉、肩甲骨の上のあたりを生暖かい湿つた感触がやけにゆつくりと舐めあげた。

「どうやらサンタから贈り物のようだ

クッと喉の奥で笑う男の言葉に、あたしは拳を固めてふるふると震わせた。

アンの裏切りものおおお。

web拍手お礼小話つめつめ（10）

「いい加減、離れろ！」

げしりと蹴倒し、後に残つたのは腰抜け状態のあたしと「つまさこ」無様な有様でした。

駄目だ、生理的にムリだ。

ギャンツというだけで力が入らなくなつて身震いが酷い。

そしてギャンツを蹴倒した白いオウム 今は十五歳程度の少年のような格好をしたルウはへなへなになつているあたしの前で腕を組み、

「おまえはアホかーっ」

理不尽な怒鳴り声を発していた。

「好き勝手やらすな、バカチビ」

「お、おまえだろーっ」

楽しんでいたのはおまえだつ。

「このバカ鳥っ」

「うつせー、阿呆チビ。つつかおまえの使い魔じうした？ オレは帰るからな？ エリイの家に帰るからな？ くそつ、どうしてオレがおまえの家で、あの糞狼がエリイの家担当なんだよ。まったく意味判んねえ。早く帰る。俺は帰る。帰るんだからなつ。おまえの使い魔はどこだつ？」

たんたんつと足で床を叩きながら睨み付けてくる鳥 人間バージョンは苛々と辺りを見回した。

久しぶりに会つたが、あたしは気付いてしまつた。この鳥は人のことをチビだなんだというがちょっとまで。

「鳥

「つせーつ、なんだ、ちび

「……どひがえてもあたしのまひが背高いよ」

「誰が身長の話をしてんだよー。オレはおまえの使い魔の話をしてるんだろ？』

* なんだかんで一人で残して帰れない兄貴分ルウ……転移のできない蝙蝠が中央から戻るまでブラン家にお留守番。

「何でも拾つてくる癖どうにかして下さいっ」

エリサは帰宅した主に思いつきり噛み付いた。

ロイズの肩には羽を持つへんな動物が乗つかっている。顔は獅子のように見える。尾はまるでトカゲのようだ。激しくなついているのかロイズの頭にすりすりと頭を寄せている。

「拾つたんじやない」

げんなりとしながらロイズは廊下を歩き、足元にいるダステイの頭を軽く撫でた。ダステイは激しく威嚇しているが、肩の生き物はそ知らぬ顔だ。

「だつたら」

「もうつたんだ」

「同じですよつ。うちににもう犬も猫もいるんですからねつ」

エリサのギャンギャンという声に、肩にいたティラハールはぼんつとその姿を少女のそれにかえ、エリサは目をむいた。

「なつ、はあつ？」

「……使い魔なんだ」

ロイズの言葉は歯切れが悪い。

「犯罪？　え、えええ？」

「何が犯罪だ！　オレは幼女趣味とかじゃないからな！」

なんで「こんな」と云……

* * *

田本昔話し　プラン太郎

あるといひに「おじさんとおばあさんが……はいなくて、あるといひ巡回中の警備隊隊長がおつました。隊長ロイズが川辺をあるいていふると（略）

「どんぶりうつ」などと流れてきた大きな桃をロイズは持ち帰りました。

「何すか？」

「違法投棄かもな。産業廃棄物かもしれん」

眉間に皺を寄せて言つ警備隊隊長の言葉に、彼の部下は言いました。

「とりあえず冷やして食べますか？」

「駄目だ。これは一定期間の間保存してその後は処分する。また同じように流れてくるかもしないしな。こんな大きなものを川に流すなんて非常識だ」

倉庫に放り込んでおけ。

淡々と処理する隊長に、「食べぢやねばいいのにー」と彼の部下は不満顔で倉庫へとソレを運んでいました。

* ブラン太郎生まれない。

* * *

あるところに……（もつと略）
引きこもりで根暗と噂のあるエイルですが、たまには川辺の散歩に出でいると川を流れてくる大きな桃と遭遇しました。

「.....」

大きいです。

エイルは静かに流れるそれを見つめました。

奇怪なものは大好きですが、相手は桃です。大きくて桃です。研究材料になるかをじっくりと考えましたが、どうみても桃。そして生憎とエイルは自分の腕力と体力に自信もありません。

ぐぐぐっと更に考えたようではんのちょっと眉間に皺がよりました。

どうやら持ち帰ることにしたようです。わざわざ使い魔（蛇形・ぬめぬめ）を呼び出し、持たせました。帰宅するまでの間町の人は阿鼻叫喚です。

自分の研究室でそれを割つてみると中から玉のような……（
以下略）

阿鼻叫喚でした（ブランだけ）

* いくらブラン太郎でもエイルに育てられたくはないだろうなー

ティラハール

皆様、いかがお過い」しでいらっしゃいましょうつか。
悪い魔女のブランマージュ。華麗なる第一のトビュ……といいた
いところですが！

「ブランちゃん、ブランちゃん？」

「なーうウ

あたしは押しつぶされたカエルのような声で応えた。

何故ならあたしは本当に押しつぶされているから。そして何より、「あらあら、ダステイ、ブランちゃんが苦しそうよ~」

くすくすと実際に楽しそうに手を伸ばして侍女のヒリサはあたしを犬の前足の下から救出し、その腕の中に抱き上げた。

そう、あたしはブランマージュ。

相変わらず白い猫ですが、なにか？

そもそもや、分離つて簡単にレイリッシュは言つたけれど、オレンジジユースと牛乳を混ぜることは簡単でも、その一つを分けるつてここのは実際たいへんなコトだとなあぜはじめに気付かない。拳句の果てにあの大悪魔は笑いながらおっしゃった。

「簡単にできたら今頃はティラハも分離してると思つ」

わかつてゐるぢやないですか！

わかつてやつてる訳ぢやないよね！？

喧嘩なら買つよつ。つて……いや、うん、冗談ですπ。レイリッシュ

ユーワイ。

そんなこんなで分離の利かないあたしひたら、口口口ネが優しいものだから未だにロイズの家で猫ボランティアに励んでいる。

けつ。

昼間はエイルの邸宅で文献を漁り、夜はこうしてロイズの家で猫をしている。え？ 蝙蝠はどうしているって？ 蝙蝠って言つのは逆さづりになつてゐるモノよ、そつでしょ？

それでもつてもうこいつ「」報告することがあるとすれば、ロイズの家に家族が増えました。良かつたね、花嫁さん？ ではなくて、娘さんです。

それはそれは愛らしいお人形さんのようなティラハールが、あたしの大好きな寝場所であつたソファに座つてゐる訳ですよ、奥さん！

無表情で。

「ティラちゃん今日のご飯はお肉がいいかしら？ お魚？」

エリサは困つたようにティラハールに話しかけるが、勿論ティラハールは無言。まるきり置物状態だ。

話しかけても返答は無い為、エリサも扱いに困つている。ほうつておけばいいのに、と思いつつ、あたしはエリサの腕から抜け出してティラハールの膝に飛び乗つた。

せめて動きなさいよ。顔振るとか。

なんであたしが氣を配らんといかんかね？

あたしはさー、悪い魔女なんだよ。今は色々恩義のあるヤツの家で

ボランティアしているだけで、それ以上のことを求められも困るのよ。

『人間は好みぬ』

よく言うわよ。あんたつてばロイズ大好きじゃないの。なついてるつて、本当に。

あたしがケツという気持ちを込めて「にゃーにゃーにゃーにゃー」と言えば、ティラハールは物静かにいつものだみ声で応えた。

『なついてなどおりぬ』

「にゃ？」

『あれは最後の晚餐にする」と云った

……保存食ですか？

なんというか、好物は最後に食べたいタイプってことでスカ?ロイズ、ある意味やつぱり気に入られてるみたいだから、えっと、良かったね？

心が狭い男つてこいつのはた、やっぱ嫌われるもんだと想つたのよ。男つてこいつのは、どんな事態も鷹揚に受け止めて、女性が困つたらにっこりと微笑んで手を差し出すもんよ、そうじゃない?

ああ、うん。『めんちゅうと想像しちゃったわよ。

エイル・ベイザッハに限つていえばこいつこいつ微笑んで手を差し出したりしたら気持ち悪いのでやっぱり却下。

でもさ、だからといって顔を合わせた途端にぴしゃりと窓を閉めるつてこいつのはどうかと思つたのよ?

「ダーコンつてばっ」

「つるせこ、黙れ。消えろ」

うわー、子供かおまえは。

あたしは嘆息しつつ、今は魔力を自在に操れる魔女としては窓を閉められたことなどものともせずに一瞬のうちに室内に入り込んだ。

「ちょっと人の話くらい聞きなさいよ」

大人気ないと思わない訳?

あたしが口を尖らせていえば、エイルは冷たい視線を更に細く、そして口調までも冷ややかに口を開いた。

「猫の話など聞けるものか」

やつぱり?

あたしはエイルの机の上にちょここんと座りつつ、かしかしと鼻先をかいだ。

「にやうん？」

「燃やすぞ」

「やあねえ。愛がないわ、愛が」

「猫に愛を求めるな！」

「やあん、愛してるうつ」

あたしが愛らしく小首をかしげて言えば、Hイルは呴きついたままあたしを睨みつけた。

「やう言つのであれば何故私の前で人の姿をとるひせぬのだ」

「あら、したくてしてこる訳じゃないのよ？ それは誤解よお

「ほお」

「うわ、信じてないわね。

ま、嘘だけじゃ。五パーセント、う・そ・ですけどねえ！

あたしは哀れっぽく「なうー」と泣きつつ、自分の田元をかしかしどかいてみた。

泣いているように見えるかしら？ 猫だとちょっと微妙よね？ 顔洗っているように見えたら失敗としかいにようがないわ。

「イリッシュ

「悪魔の呪いのおかげで猫と融合しちゃったあたしひてばぜんぜんちつとも分離できないの。体内のバランスをとる為に猫姿がデフォルトなのよー。ねえ、可哀想だと思わない？」

「……」

いや、胡散臭いものを見る止めなさいよ。

確かに嘘が一杯だけどさ、本当のことだつてちよつとは混じつてゐんだつて。女の嘘はある程度許容しつけよ。

口イズだつたら信じるよ？ こつちが罪悪感で一杯になるくらい口イズだつたらどんな嘘も信じるんだから。

本当に……悪い女に騙されるんじゃないかと余計な心配したりやつわよ、あたし。

「 いのなつた責任はとーゼンダーリンにもある訳だし、 いのは 一つ快く協力してよお」

「 猫の頬みなど知らぬ
くうつ、 いの根性悪！」

猫が頬んでいるんだぞ。 白くて可愛い子猫がやつ。 とまで考えて仕方ないとあたしは息をついた。

猫が両手の肉球を愛らしく含ませて「 にゃー」とかにっしゃつた日には、 猫フェチ一級のロイズだつたらどんな願いもきいてくれるに違いないのにつ。

というあたしの心の豆びは、 生憎と心だけに留まらずに思につきり口をついて出たらしい。

Hイルは無表情であたしをつまみあげ、 またしても窓を開け放ち外へと放り出した。

くそあつ、 動物虐待反対だつてばー！

あくまでも猫を相手にする気はないというのだな、あの野郎。

あたしは対抗意識をめらめらと燃え上がりせ、 猫で駄目ならと仕方なく人型へと変化した。

こうなれば先手必勝「 いめんなさい」は無理といえども「 ゼひ強力致しましょ」の言質を奪い取り、 奴隸のよひにひき使つてやつではないか、 エイル・ベイザッハめつ。

あたしはまたしてもエイルの執務室の机に転移を果たし、 エイルの首にしなだれかかるよひにして腕をまわし、 アンニーナをまねて甘く囁いた。

「お・ね・が・い、ダーリン」

ダーリンの無駄に多い蔵書と、悪魔のような魔物融合術を是非ともあたしの為に役立てて！

やつとお願いを口にすると、冷ややかな瞳の男は恥々しゃり口にした。

「おまえ、私を馬鹿にしておるだらう」

低く唸る口調に、あたしは瞳を瞬いた。

「何よ、突然」

「報酬は？」

その言葉は思い切りあたしの意表をついた。

まさかエイルが報酬を求めてくるとは思わなかつたのだ。
あたしはしばらく眉を潛め、むむむと唸つてしまつた。
いや、確かにあたしに協力することはエイルにとつて何かの利点につながる訳ではない。それにエイルの仕事の邪魔かもしれないが……

「友達じゃないかー」

とふざけた口調で言つてみたが、相手の冷たい視線は変わらない。
あたしはむーっと困り果て、猫耳 相変わらずあつてスミマセン
ネ をへたりと下げた。

「おまえに協力する代わり、私は魔女の研究の為におまえの助力を
請う」

その言葉に、ぱつと耳が立ち上がつた。

「そんなんでいいの？」

あたしの声のトーンが跳ね上がるのと同時、エイルは口元を緩めた。

「ああ 良いな？」

「勿論よ、ダーリン！」

いやあん、なんか脅すように言つから「現金」とか「現物」とか色々想像してみたのだが、実際の要求はなかなか簡単そう。そうよねー、ダーリンだつてちょっとひねくれててちゅうと性格がアレだけど、基本的には悪いヤツじゃないのよねー。

「やあん、もおダーリンつてば意地悪つぽく言つから身構えちゃつたじやないの。魔女の研究ならこくらでも手伝つてあげるわよー」

だつてあたし魔女だもん。

「その言葉、嘘ではないな？」

きちんと念を押す男に、あたしは「魔女の誓約は絶対だもの。嘘なんてつかないわよー」とへらりと応えたが

あれ……

あたしははたりと面前の、やけに甘い微笑を湛えた男を見返して言葉を飲み込んだ。

あれ、えつと……？

あたし、なんかまずいこと、言つた、か？

何故か背筋にぞくぞくと悪寒が走り、あたしは自分の耳がへたつと下がるのを感じつつ、エイルの胡散臭い微笑を「はは？」と見つめ返した。

あれ……？

日本昔話、竹取物語。

昔竹取の翁ありけり……ではなく、第一隊隊長、ギャンツ・テイラー氏が竹林を散策していると、奇怪な光る竹を発見致しました。ギャンツはいぶかしみ竹を吊き、とりあえず割つてみると、にぎこちます。するとどうでしょう。猫耳猫尻尾のそれはそれは半泣きのブランマージュが完全耳ふせ状態で身を震わせておりました。

「これは可愛い！私の家に連れて帰つて嫁にしよう」
「やめろーっ、やめろー、いやマジで止めてトセー」
「ふふふ、嫌がられるどゾクゾクする」

ブランマージュは抵抗しようと恐怖で身がすくんで動けませんでした。

かくしてギャンツは幸せに暮らしました。
めでたしめでたし。

* ギヤンさんこれでも警備隊第一隊の隊長さんなので監禁とか誘拐とかは止めよう。

* * *

あなたの田の前に白い猫がいます。

「つれて帰つて風呂に入れてご飯をやつて可愛いがる

あなたの田の前に白い猫がいます。

「普通の猫に用はない」

あなたの田の前に猫耳猫尻尾のブランマージュがいます。

「……耳は触つてもいいんだよな？ 尻尾は逆撫でしなけりやいいか？」

あなたの田の前に猫耳猫尻尾のブランマージュがいます。

「紛い物のブランマージュになど用はない」

あなたの田の前に極普通のブランマージュがいます。

「えつと、どうじょうか」

普通のブランマージュだとどうしていいか判らないんですね、ロイズさん。

あなたの田の前に極普通のブランマージュがいます。

「

いや、いいです答えなくて。答えなくていいですから！」

* 全然関係ないですが、プロットの段階でエイルをエ、ロイズを口で書いていたら、二人並べてエ口になつて思考が停止したことがありました。うん、全然関係ないですがね？

白いオウムのルウがその小娘を見たのは、小娘が九つの頃。それまでは実に平和な日々だった。

大事な主人であるエリィフィアと二人 もう一匹余計な使い魔はいたけれど、少なくとも自分の世界にはエリィフィアと自分だけの平和な日々だった。

新しく見出された魔女はエリィフィアに引き取られた。

名前はブランマージュ。赤みの強い金髪に好奇心の強そうな琥珀色

の瞳のチビ魔女だつた。

「鳥だつ」

九つの小娘は瞳をきらきらして自分を見ていた。

鳥じゃねー、オレはオウムだ。キバタンだ。カツコイイだろー!
その羨望の眼差しに気をよくして、オレは羽をひろげて嘴でわざわざ身づくりなどしてやつた。

「ヒリィフィアつ」

とても嬉しそうに小娘は言つた。

「コレ、今夜のご馳走? あたし焼き鳥大好き」

小娘ええええつ。

ぜつてえ泣かす!

オレ様の前で焼き鳥好きだとかほざいてんじやねええつ。

* その日戦いの火蓋は切つて落とされた!

* * *

「あー、髭剃らないとなあ」

自分の顎先に軽く触れながらロイズがぼやく。

ロイズは熊だがそんなに髭が濃いほうではない。その為に二三回にいつぺん程度しか髭をそつていない。

「あなたは髭も頭も濃くないもんねー」

「どういう意味だ」

ロイズが目を眇めるが、あたしは気にせず口の中にマシュマロ

を放り込んだ。

「あれ、そういえばダーリンは？」

「……あいつが髪を生やしているのは見たことが無いな」
あたしは瞳をまたたき、エイルに思いつきり声を掛けた。

「ダーリン！」

「なんだ」

「ダーリンって髪生えないの？」

「……それが何だ」

「もしかしてどこもかしこもつるつる？」

あたしはめちゃくちゃ興味津々でエイルの足を見たのだが、ロイズが慌てたようにあたしの襟首をつまみあげた。

「品の無いことを言つくな！」

「品の無いことを言つていいのはおまえだ！」

……判らない人はわからなくていいのよー？

* * *

「トリー」

耳障りな声がばたばたと足音をさせてやつてくれる。
オレは苦い気持ちで顔を背けた。

「ちきーん」

「誰がチキンだ、糞ガキ！」

「だつて名前教えてくれないんだもん」

「だーれがあまえなんぞに教えるか。ばーか」

使い魔は主に名前を教えるが、それいがいの相手にはわざわざ名
を教えたりしない。勿論、相手が主よりも上位の魔女ならば礼儀と

して教えることもあるが、すくなくともこのチビ魔女は到底名を教えてやれるような魔女じゃない。

そして使い魔の名は教えられない限り口にしてはいけないという決まりがある。

おまえなんぞ魔女の中でも最下位だ！

「鳥が教えてくれないから好きなように呼ぶのよ。馬鹿じゃないのか？」

朝からばたばたとうるさい一人に、エリイフィアは持っていた乗馬用鞭をふるい、びしりと椅子を叩いた。

「御黙り、そこの馬鹿一人っ！」

エリイフィアあああ、オレは、オレは違つだろ。
ちくしょうっ。エリイフィアに嫌われたらどうしてくれるこの糞ガキつつ。

きいいいっ。

「ルウ、煩いっ」

戦いはまだはじまつたばかりだった。

「ヒリューシュ」

力チンときた。

チビ魔女が陽気な声でその名前を口にした。つまり、それはそいつが名前を教えたといつことだ。

エリュー・シユ。

もう一人のエリィ・フィアの使い魔。

普通の狼の一倍は大きい灰色狼のエリュー・シユ。

エリュー・シユは無言でそのふつさりとした尾を動かし、ばしばしとチビ魔女を叩いている。

チビ魔女はそれを「遊んでもらってる」とでも勘違いしているのか、掻もうと手を伸ばしては逃げられている。

ふんっ。

ガキのお守りなんぞオレには到底できないね。

馬鹿じやねーかエリュー・シユ。おまえは狼だろ。犬みたいに尻尾ふつてんじやねーよ。

オレは冷めた視線でそれを見つめた。

あーあ、プライドがないのかね、そんなガキの相手しちゃってさ。

チビ魔女の手ががしりと尾をつかみ、力任せに引っ張った。

途端、エリュー・シユはがばりと顔を向け、ぐわっとその大きな口を開いた。

「くうんじやねえつ」

あぶねえつ、あぶねえよつ。

くそっ。ちきしょうつ。これだから肉食獣はあぶねえつ。

オレはぼわんつと人の形になり、大慌てでチビ魔女を引っつかんでエリュー・シユから引き離した。

「うわっ、鳥が人になつた」

使い魔だからな！

つか、何おまえは暢気に馬鹿なこと言つてんだよつ。

くそつ、つてかなんでオレはこいつの面倒みなきゃいかんのだ！！

……ルウの立ち居地が確定した瞬間。

* * *

「あげる」

まるで語尾にハートマークでもつけそうな勢いだった。

漆黒の魔女は満面の笑みで言つ。

ロイズは困惑していた。

肩に乗つかつたまま離れないティラハールに。

まあ、手を伸ばして抱っこすれば普通に抱っこされるのだが、他におひすとその羽ではたはたと舞い戻り、肩に乗るのだ。

ほとほと困り果て、飼い主（？）に差し出そうとしたら、その飼

い主（？？）がにっこりとそんなことを言つのだった。

「あげるつて、猫の子じゃあるまいし」

「あんまり変わらなくてよ？」

いや、かわるだろ？

魔力など欠片もないロイズにしてみれば、魔獣や使い魔なるものに関わることなど滅多にありはしない。滅多というか、普通の生活でそれは考えられない。

「使い魔、ですよね」

思わず低く尋ねるが、

「主はないの。もう死んでしまったから

行き場がないからあ

たくしが面倒を見ていたのだけれど、全然言つこと聞かないし

……そのことを聞かないティラハールは、ロイズに抱っこされた状態でレイリッシュ相手に歯をむき出しだしている。

「あなたのいうことを聞かないのがオレの言つことを聞くとでも？」

「聞きそうじゃない？」

あつやうと言われ、ロイズは眉をひそめた。

「オレ、猫を飼ってるんですけど」

「猫は食べないとと思うから」

「食うのかつ」

「食べないって言つてるでしょ 食べないわよね？ ティラハ

そのあやしい確認は辞める。

「とにかく。オレは魔導師でもないし使い魔は無理です

「無理ですって、ティラハ。どうする？」

その言葉に向を思ったのか、ティラハールはぼわんつとこつもの愛らしげな少女姿になると、ロイズの腰に抱きついた。

「その姿ならしいだろうつて言つてるけど？」

「もつと良くないだろー！」

* * *

「レイリッシュ！」

ぱりつとレイリッシュは餅菓子をかじった。小気味良い音があたりに響く。

レイリッシュは塔の寝椅子に転がり、すばらしく自堕落に過ぎないしている。

「なによー？」

「分離のやり方が判らない！」

あたしの怒鳴り声に、レイリッシュはにっこりと笑った。

「奇遇ね？　あたくしも判らないわ」

「はあああ？」

「そもそもそれができればティラハールも合成獣のままじゃないわよ。あの子つてば幾つ合成されてるか判らないのよねえ。あの声からしてセイレーンとかそのへんも入つてそうなんだけど、実際はちよつと判らないし」

なんですとつ。

「もう一つそ産み落とせば？　魂は魂だから、体を引えて体外に出せばいいのよ。」

「はあああ？」

「いろいろ実験してみたんだけど、一応子供は作れると思うのよ？　魔力が子宮に影響をあたえて子供が定着しずらいみたいだけど、あんたの体はそのへん細工してみたから。やつてみれば？」

どんだけ人体実験してやがる。

「子作りなんぞ一人でできるか！」

「やあねえ。そのへんの男引っ掛ければいいでしょ。あ、そりゃ、あんた押しかけ婿いるでしょ」

「いないわよー！」

もつ本筋にこの大魔女イヤだ。

ふえいす

「あれ、こんな顔だつたっけ？」
あたしがあたしの体を取り戻して一月　といつたところで相変わらず猫耳と猫尻尾を保有していますが、そこはあえて突っ込みない方針で。

放置してきた蝙蝠が自力ではたはたと帰宅したのは一ヵ月後。
同じ大陸といえど、結構広いんだね。

「いやあ、蝙蝠って羽根持つている癖して案外動き鈍いんじゃないの？　いくらなんでも一月つて、その存在すらしつかりと忘れてたわ」
「つて、マアスタアアアア」
「な、訳あるかつ！」

切なそうな声をあげて飛んできたよれよれの蝙蝠を引っつかみ、
あたしは思い切りベシンと地面にたたきつけた。

動物虐待？

訴えるなら訴えるがいいわ！

あたしはなあ、こいつの仕打ちを忘れないぞ。
よりもよつて自分の主人を裏切る使い魔がいてたまるか？
レイリッシュの馬面がレイリッシュを裏切るか？
エリイフィアのキバタン馬鹿オウムがエリイフィアを騙すことがあらうか？

絶対に、ナイ。

だといつのに、この腐れ蝙蝠は自分の主の体のありかもレイリッシュの思惑もすべて承知した上で口をつぐんでいたのだ。

あたしの体で思う存分着せ替えを楽しみつい-

帰宅して吃驚だよ。

知らない衣装が阿呆のように増えてた。

ハンドメイド・シコオン・オリジナルの衣装が。

力いっぱい床に叩きつけてやった蝙蝠だが、こちらの意思に反し、床に叩きつけられる寸前、ぽふんっと人形に変化し、そのままぎゅうっとあたしを抱き込んだ。

「マスター、会いたかった。会いたかった、会いたかったです」
「くおのっ。まだこっちは許してないってばっ」
「えええ、どうして怒ってるんですか？」

滅びされ！

お前の頭は鶏並みか？

三歩歩けば忘れ去る仕様なのか？

この//ジンコ脳みそ。

ぎりぎりとあたしが奥歯をかみ締めると、相変わらず三割残念なエイルの顔のシコオンは本気で理解できないという様子で瞳を瞬き、こちらの怒りなどどこ吹く風で「マスター」とすりすりと頬を擦り寄せてくる。

「へへへ、会いたかったです」
「怒ってるんだってば」

「怒ってるマスターも好きだからいいです」

お前はどうかのドミと一緒にかつ。

くあああ、このお話にならない感じ、ホントウに、間違いなく、うちの馬鹿蝙蝠だわ。

あたしはイライラとしながら、ぐぐっと相手の腹を押して一人の間に隙間を作り、びしりと床を示した。

「お座りつ」

命令にシコオンはちゅうさつと床板に座る。へらへらと実際にさせそうに

エイルの顔で。

ごめん、ホントウにソレ氣持ち悪いわ。自分でやつといてなんだけどれ。

だつてエイルだよ、エイルちゅうと想像してみてよ。あの悪魔類鬼畜田がさ、なんかぶんぶんと尻尾振つて大型犬みたいに嬉しそうに座つてるの。

これから怒られるつて判つているのにだよ？

もつ色々無理。

しばらくは罰としてエイルの格好のままでいたせてやるつもりだったが、これではどちらが罰を受けてこのか判らない。

あたしは片手を軽くあげ、ゆっくりとお腹から呼吸を繰り返す。お腹にあつた酸素を全部吐き出し、ゆっくりと大気中の魔力を練り上げながら、今度は空っぽのお腹に溜め込んでいく。

手の中に出現した杖を道標に、あたしはシコオンの体に掛けられた自らの魔力の紐をゆっくりと解き上げていく。

エイルの灰黒の眼差し、塗れたような黒髪薄い唇。

そのすべてが、徐々に失われて、そしてそこにちゅんつと座つてい

るは薫色の人懐こい瞳と髪の青年。

エイルのような余計な色氣など持たず、悪意も悪氣もなさそくな
脱力系。

「あれ、あんたってそんな顔だつたっけ？」

「うわー、すごい違和感。

座った姿勢のまま、ショオンは自分の手を伸ばし、頬に掛かる自
分の髪を引っ張つた。

「ぼく、元に戻りました？」

「なによ？ 何か文句あんの？」

「いや、ほら。ぼくってば視力弱いから いまいち実感が
ショオンはいいながらひらひらと手を動かし、ふいに立ち上がる
とやつと安心したように息をついた。

「ああ、マスターとの身長差が戻つてゐる」

言つや、またしてもショオンはあたしの肩にがばりとはりついて
ぎゅうぎゅうと抱きついてくる。

「これで元通り。」これでずうっとぼくとマスターといつも通 」

「うか。うか。それは良かつたな。

あたしは相変わらず耳も尻尾もあるけどね。

一足先に元通りであんたはいいよね。

なんだかムツとしたものの、あたしは激しく脱力を覚えてひらひら
と手を動かし、良かつたなと示したやつたのにも関わらず、ショオ
ンは突然がばりとあたしを離し、部屋の片隅にある鏡にじり寄つ

て叫んだ。

「マスターあああ、なんかやつぱり、顔違つぱほーんですかああ

……半年へりいたつとまじり、顔つて変わるんだって、わひと。

「ちよつ、マスターっ」

今、今思い出すからつ、ちよつとまつてるー。

ちよつとやつの方間違えただけだつて。

ちよつ、泣くなつ。

……卅、さうでもこいか。

オレ、お前のことが好きだ。

一世一代の告白は、綺麗さっぱり流されてしまった。

「隊長？」

思わず握っていたペンがべきりと音を立たせたと共に、面前のクエイドは引きつった顔を浮かべてみせた。

「いや、はい。すみません。もつと真面目に書いてきます」

本日の日報の内容に怒りを見せたのかとも思ったのか、慌てて提出した日報を引き抜くようにして逃げていくクエイドを見送り、警備隊第一隊の隊長を務めるロイズ・ロックは眉間にくつきりと浮かんだ皺を右手の親指と人差し指で軽く揉み解した。

仕事中に考えることではないのは理解しているが、突如として思い出される感情はいかんともしがたい。

拳句「町に戻つたら話しがある」とまで言つたにも関わらず、相変わらずブランマージュは自分の森には戻つていない。いや、第一隊のギャンツ・ティラーの話では一旦戻つたらしいのだが、その後は見かけていないそうだ。

実際は自分の家でギャンツを見てしまったブランマージュが自宅にあまり寄り付いていないだけの話なのだが。

では、ブランマージュはいつたいどこに行ってしまったのだらうか。

Hイルの家、か？

ふと浮かんだ魔導師の顔に、更に眉間の皺が深くなってしまった。

一年前のエイルといえば、しょっちゅう魔女と揉め事を起こして色々なものを破壊し、幾度も罰金を徴収されていたといつのこと、そもそもあの二人はいつの間に協定をむすんだのだろうか。

エイル・ベイザッハは現在魔女狩り大陸へと引越しの為に色々と手続きなどと忙しくしていると聞いている。もちろん、エイル当人からではなく、噂に聞く程度だが。

そんな忙しくしている場所にブランマージュがいるとも思えない。

「猫を撫でて心を癒そう」

もう今日は早く帰つて猫のブランマージュを撫でまわそう。

今日も、ブランに会えなかつた

* * *

そう、今日もブランマージュに会えなかつた。

ところに、この現状はいつたい何がどうしてどうなつたのか。ロイズ・ロックは帰宅し、いつも通り上着をエリサに手渡しながら寝室の隣にある個人用の居間へと足を踏み入れ、目を見開いた。

「あら、まあ……」

エリサまでが驚愕した様子で瞳を瞬き、ちらりと自分の隣の主を見る。

普段であれば白猫のブランマージュが身を丸めて寝ている寝椅子に、クッションを抱くようして寝ている魔女が一人。

前回会った時には猫耳も尻尾も無かったものが、今は気が抜けて

いるのが完全についている。

白い耳の先端が、ぴぴぴと小さく痙攣した。

寝椅子に置かれているクッショնにもたれて、くかくかと寝ている
ブランマージュの様子に、「無断進入」だとか言つても始まらない。

ロイズは危うく「ブラン?」と声をあげそうになり、慌てて口元を押された。

「どう、致しましょう?」

エリサが動搖するのを片手で制して、ロイズは声を潜めた。

「いい 何か話しがあるのかもしれない。少し、一人にしてくれ
暗に出て行けと命じて、ロイズはなんだか息苦しさを誤魔化す
よみに自分の襟首に手を掛け、隊服のホックをはずして息をついた。

なんで勝手に人の家で寝ているのか、なんて魔女に言つてもはじ
まらない。

魔女は神出鬼没。どこからでも入り込むしどこにでも現れる。なら
ばここにいてもおかしくはない。

消えてしまふのではないかと恐れながら、そつと近づき、触れて
みたいといつ気持ちを留めて寝椅子の下に膝をつく。

□元から涎……

色氣も何も無い。

苦笑と共にその涎を胸のハンカチでぬぐつてやり。ハンカチを戻す。
さらりと流れる髪はまさに猫つ毛で多少の癖がある。肩に掛かり、
胸元をかすめる赤みの強い金髪。

日の光の下で輝くそれは、今は部屋を照らす魔道石の明かりで照
らし出される。

ヤバイ。

ロイズは片手を宙に浮かし、引きつった。

触りたい。起こしたい。でもこのままそっとしておきたい。ずっと見ているのも手か。だがなんか色々もつちよつと。

いやいや、相手は魔女だ。まずは魔力を削がなければ何をされるか。魔力封じの封魔綱は ってオレは何を考えているんだっ。

危うく犯罪的な思想にいきそうになつたロイズは、浮かしたままの手をぐつと引き戻し、こぶしを握り「ほんり」と一度わざとらしく咳払いを落とした。

「ブラン、おい、ブランマージュ」

一度名を呼び、今度はおそるおそるブランマージュの肩にそっと手を掛ける。

ほかりと温かな体温が手に伝わり、長ことと熙つていたと思われる微笑ましたに少しだけ田元が和んだ。小ちく身じろぎした体に、べつたりとクッシュョンにもたれていた頭が僅かに上がる。

ぼんやりとした琥珀色の瞳がロイズを捉え、不思議そとに見つめ

「――」

「……」

ブランマージュはロイズの手にするつと猫のよひに頭をすりつけた。

「ブ、ブランっ？」

ばくばくと心音があがる。

まるで猫のよひな仕草の魔女に、悲鳴のような声をあげるとブランマージュは瞳を瞬き、がばりと体を起こした。

「なんであんたがいるの?」

「つて、こにはオレの家なんだが」

突然体を起こして怒鳴るブランマージュに、冷静に指摘すれば相手はきょりきょりと辺りを見回し、しばらしつたのちに奇妙な声で「あれー?」と小首をかしげた。

途端、なんだかがつくつとロイズの気が滅入る。

「オレに会いに来た訳じゃないんだな」

「えつと……んー……いや、会いたいとは思ってたのよ。ちょっと話があつたし。ああ、だから無意識にここに来ちゃったのかしら?」「やあね、と空笑いを浮かべてみせるブランマージュに、ロイズは一気に心が浮上した。

「オレも話がある」

いや、だがこの立ち位置はどうだらう。

ブランマージュはクッシュョンを抱き込み、寝椅子に座つている。対してロイズはといえば、その前で膝をついて半立ちの状態だ。

なんとなく居心地が悪く、ロイズは自然に あくまでも自然になるように、寝椅子の淵に手を掛け、ブランマージュの隣にどさつと腰を落とした。

なんだか無駄に緊張する。

ああ、コレは失敗か。ちゃんと相手の目を見て会話を成立させる上で、隣同士に座るというのはどうなんだ。

生真面目な男、ロイズ・ロックの動搖をよそに、ブランマージュはひらひらと手を動かした。

「ああ、そうだった。で、あなたの話つて何よ?」

ブランマージュがやつと思い出してくれた様子でちらりと隣のロイズへと視線を向ける。小首をかしげて促すその様子に、ロイズは緊張が高まり、引きつったように笑みを浮かべた。

「いや、俺はあとでいい。何か話しがあるんな、ブランからでいい

そういうと、ブランマージュはおもむろにがばりと立ち上がり、真正面からロイズを見て、僅かにロイズを見下ろし、がしづとその両手をロイズの肩に掛けた。

「あなたのトコの第一隊隊長のドミをどうとかじりつ」

「……はい？」

「人の家を我が物顔で掃除してゐるのよ。おちおち家に帰れないじゃないの。ひょこのHプロンして楽しむて台所を占拠してゐるあのドミを即行だらうとかしてよ」

ぜんぜん話が見えない……

そして見たくない。

「出て行けとか、馬鹿とか言つても逆に嬉しそうに照れるのよおおお

お」

鳥肌がたつのか、自分の体をぎゅっと抱きしめるブランマージュは半泣きで訴え、感極まつた様子で両手を伸ばし、ロイズの首に腕を巻きつけ、抱きついた。

「打つても、殴つても喜ぶつてどうなつてゐの」

尊敬する第一隊隊長のそんな姿は心から見たくない。腕の中でさめざめと訴えるブランマージュをあやすようにぽんぽんつとその

背を叩か、

「あー、うん。なんとかする。しばらく自宅に戻りたくないのか？」

「なら、オレの家にいてもいいんだぞ」

それが原因でブランマージュの森にいなかつたのか、とやつと納得して 少しばかり照れを押し隠しつつ提案すると、しかしブランマージュはなんとか落ち着きを取り戻した様子で顔をあげた。

「提案だけ喜んで受けけるわ。あつがとう

「……大丈夫なのか？」

「大丈夫」

まさか、エイルの家に居るんじゃないよな？

心臓がつかまれるよつて痛む。とつかと思つてしまつた事柄はしつかりと口から出ていたらしく。

ブランマージュの瞳が瞬き、笑う。

「なんでエイル？ あの家でおちおち寝てなんてられないわよ。いつ実験させられるか判らないじゃないの。違うわよ」

せりつと言われた言葉にて、自分の醜い嫉妬を見透かされたような気がして羞恥が立ち上る。

かあつとあがる体温のまま、勢いに任せ

「ブランフ」

一度離れた相手の体を抱き寄せよつとした途端、ブランマージュはとんと床を蹴つていた。

「つてことで、頼んだわよ。第一隊の熊隊長殿つ

「ちゅーっ」

「じゃあねーっ」

つて オレの話はビリなったんだ。

叫ぶ間もなく、ブランマージュの姿は忽然と消え去り 瞠然としているロイズの足元で白い猫が「にゃーん」と頭をロイズの足に擦り寄せた。

「……あのっ、馬鹿猫っ」

思わず出でてしまった言葉に、自分が言われたのかと勘違いしたのか白猫のブランマージュが思い切りロイズの足に爪をたてた。

「うわっ。違う お前じゃないよ、ブラン

怒つてこむ猫を片手で掬い上げ、その顎下をなでながらロイズは深く深く息を吐き出し、目の高さまで猫を持ち上げて切なく白猫に囁いた。

「おまえが大好きなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102k/>

魔女猫番外地

2011年10月7日03時03分発行